

【2021年度 授業改善研修会資料】

A系絵画・絵画コース/専攻

遠藤 悦史

本年度、A系絵画・絵画コース/専攻（*以降、絵画コース）では、昨年度に続くコロナ禍による影響と本年度の授業実施方針に基づき、対面授業を主体とする一部の遠隔授業を取り入れた「対面・遠隔のハイブリッド型」の授業形態により実施してきた。

1年次から4年次までの各学年の遠隔対応率は、学年によって多少の差はあるものの平均約1～2割程度の水準で対応を行ってきた。本報告では、主に絵画コースにおける「対面・遠隔のハイブリッド型」授業形態の運営方針と実施事例、それに伴う様々な問題点や対処例などについて、各学年の実施例とともに報告する。

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

絵画コースでは、本年度の授業実施方針に基づき、対面授業を主体としながらも一部遠隔授業を希望する学生に対しては、遠隔授業の対応体制を取ってきた。遠隔対応の授業内容については、対面授業と比較すればやや質的水準は下がるものの、昨年度の実験を活かし、シラバスの授業概要と到達目標に則った自宅でも制作可能な課題内容を実施し、指導体制としてはできるだけ対面授業に並行して参加できるような様々な工夫を行った。それらの実践事例について、各学年の授業形態を基に紹介する。

〈各学年の在籍者数（専門科目履修者数）と対面・遠隔の人数比〉

【1年次】

- 在籍者数
(例「絵画Ⅱ」履修者数)
・・・・・・・・・・21名
- 対面受講者数
・・・・・・・・・・20名
- 遠隔受講者数
・・・・・・・・・・1名

【2年次】

- 在籍者数
(例「絵画基礎Ⅳ」履修者数)
・・・・・・・・・・27名
- 対面受講者数
・・・・・・・・・・22名
- 遠隔受講者数
・・・・・・・・・・5名

【3年次】

- 在籍者数
(例「絵画表現Ⅳ」履修者数)
・・・・・・・・・・34名
- 対面受講者数
・・・・・・・・・・32名
- 遠隔受講者数
・・・・・・・・・・2名

【4年次】

- 在籍者数
(例「卒業制作」履修者数)
・・・・・・・・・・37名
- 対面受講者数
・・・・・・・・・・32名
- 遠隔受講者数
・・・・・・・・・・5名

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

〈1年次・2年次の課題設定〉

1、2年次の専門科目は、基本的に基礎課題科目である。そのため、教室での「静物課題」「風景課題」「人体（着衣・ヌード）課題」「ドローイング」「ミクストメディア」「古典技法」など、描く対象が大学にあり、来校しないといけない課題が多いのが特徴である。従って、遠隔対応を行う場合の課題内容は、対面对応と全く同じ内容の課題にすることは難しく、それに準じた課題内容を設定せざるを得ないのが現状である。

しかしながら、授業概要と到達目標は対面授業と同等に扱うことが求められるため、遠隔受講者が自宅でも制作可能な無理のない代替課題を設定し実施した。

例：1年次「絵画Ⅱ」の授業概要

- ①半吸収性下地を自作し、市販のキャンバスとの違いや下地が与える表現効果などを体験的に学ぶ。
- ②着衣のモデルを対象とした制作により、人体と衣装の関係やモデルとそれを取り巻く空間を的確に捉えること、さらに人体の存在感を描き出す表現力と人物表現に必要な造形力を育成する。

例：1年次「絵画Ⅱ」の到達目標

- ①油彩画材全般への知識を高め、支持体と下地が及ぼす表現効果や固着性について理解する。
- ②人物のプロポーション、衣装と人体、空間との関係を的確に捉え、モデルの存在感を描き出すことができる。

「絵画Ⅱ」の対面授業課題

- ①キャンバスを麻布を木枠に張るところから行い、下地の処方、塗布まで実施し、支持体を作製する。
- ②モデルを対象に、自作したキャンバスを支持体として、油彩で描く。

「絵画Ⅱ」の遠隔授業課題

- ①対面授業で行う支持体制作についてのレクチャーをMeetで視聴しながら参加する。実作は行わない。
- ②自分を対象に、対面課題と同じ規定サイズのキャンバスを用意し、油彩で全身の自画像を描く。

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

〈1年次・2年次の指導実践〉

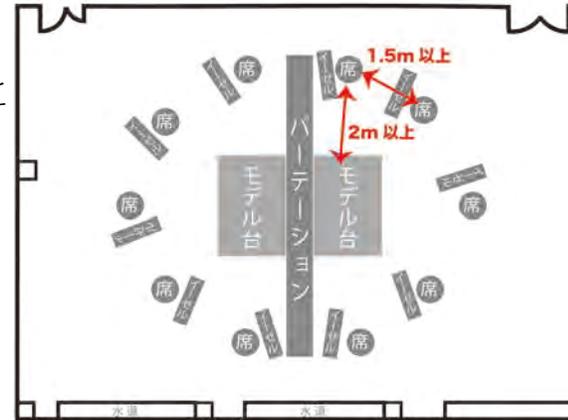
原則的に対面も遠隔もGCへの日々の画像提出は必須としている。遠隔対応では、指導するための参照材料として、対面対応では、教員が新型コロナウイルス感染症に感染したり、濃厚接触者となり遠隔指導を行わなくてはならなくなった場合の対応策として実施した。

・対面指導

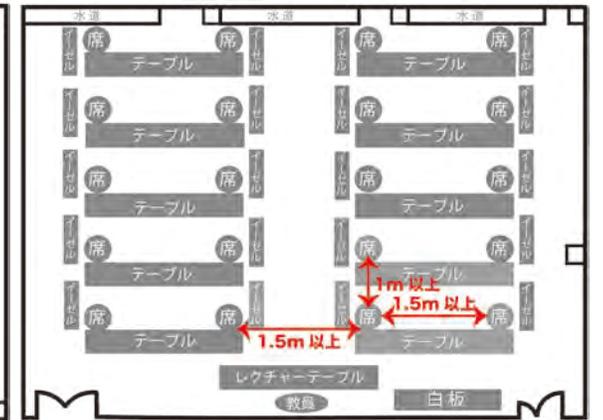
人との距離が1~2m以上離れるよう配置し、共同作業は行わず、道具も個々に使用するものとし、モデルについては人数を増やしブースを分けるなど、3密を避ける対策を行った上で巡回指導を実施した。

・遠隔指導

GCを通して、その日の終了30~40分前くらいまでに制作した作品画像の提出を行ってもらい、コメントにて指導を行った。また、導入、レクチャー、講評などの際にはMeetで対面授業に参加してもらった。

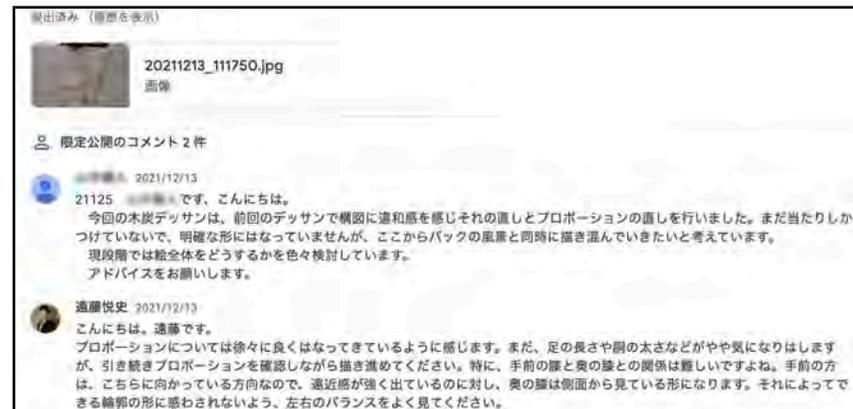


対面 〈実習教室の配置(モデル)〉
各部屋10名程度×2部屋使用
1部屋2ブースに分かれ、5~6名程度で1人のモデルを囲む。



対面 〈実習教室の配置(支持体制作)〉
長テーブルに2名ずつ配置。
道具は各自1つずつ使用する。

*** いずれも十分に感染対策を行った上での対面授業が可能であり実施できた。**



遠隔

〈GCを通したコメントのやり取り〉

対面での指導を一通り行った後に遠隔の指導コメントを返信する。

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

〈1年次の支持体制作実習風景〉



〈下地塗料塗布のための
レクチャーの様子（左上下）〉

〈塗布作業をしている学生の様子（右上）〉



〈麻布張りレクチャーの様子〉

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

〈3年次・4年次の課題設定〉

3、4年次の専門科目は、1、2年次と異なり自由テーマによる作品制作がほとんどである。そのため、自宅に十分な制作環境が整ってさえいれば、遠隔授業であっても課題制作自体には支障が来たしにくいという特徴がある。

しかし、3年次後期には学内企画展の「進級制作展」が、4年次には「卒業制作展」があるため、作品を自宅から大学へ運搬移動しなくてはならない。従って、課題設定をする際、規定を満たすサイズでありながら運搬可能な状態の支持体の準備をするよう指導を行う必要があった。

一方で、遠隔であるがゆえのサイズの縮小化、仕事量の減少化は作品の質的減退を招く恐れがあるため、できる限り丁寧で時間を掛けた指導をするよう心掛けた。

1、2年次と同様、当然授業概要と到達目標は対面授業と同等に扱うことが求められる。

例：3年次「絵画表現Ⅳ」の授業概要（一部抜粋）

- テーマや技法等は自由である。自らにあったテーマや表現の可能性を探る。
- 前期課題の経験を活かしながら制作する。同時に、新しい試みを積極的に行うようにする。
- 40号以上を2点の制作を試みる。エスキースのサイズは油彩15号程度とする。大画面への挑戦、シリーズ制作を意識すること。（内容により、40号以下の制作がどうしても必要な場合は、教員への確認・相談が必要である。）
- それぞれの制作計画を作り、自らスケジュール管理をおこなう。
- 進級制作展を企画運営し、制作と発表に必要な実践力の養成、幅広い制作活動への視点の獲得を目指す。

〈対面・遠隔の両対応〉

3番目の項目の太文字下線部「40号以上を2点」の文言については、遠隔体制以前は「80号以上を1点」であった。遠隔受講者対応に合わせて、配送業者に委託しやすいサイズである上記の太文字下線部の表記となった。これは、対面受講者に向けても同じ条件であるが、80号以上を1点という意味も含まれている。従って、80号であれば1点以上、40号であれば2点以上（連結させても可）を学生が対面、遠隔に関わらず自由に選択できることを示す。

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

〈3年次・4年次の指導実践〉

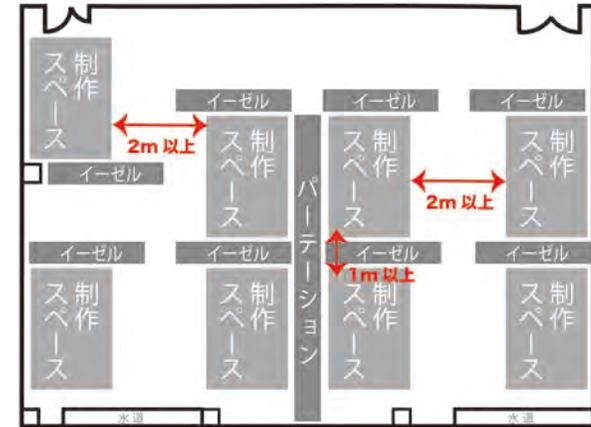
3、4年次のGCの活用については主に遠隔受講者向けに行った。制作期間が長期に渡るため、1、2年次のような対応策は取らずに実施した。

・対面指導

各ブースで十分な距離が取れるようアトリエ配置をした。通常の指導では感染対策を行った上で教員が巡回指導を行う方式で実施した。しかし、講評会のような人が密集する状況下においては、3年次は2クラスに分かれて分散させたり、4年次では別室の大講義室に学生を集め、講評者を作品会場へ個別に呼び、その様子大講義室でMeetによるLIVE配信を行うという方式で実施した。

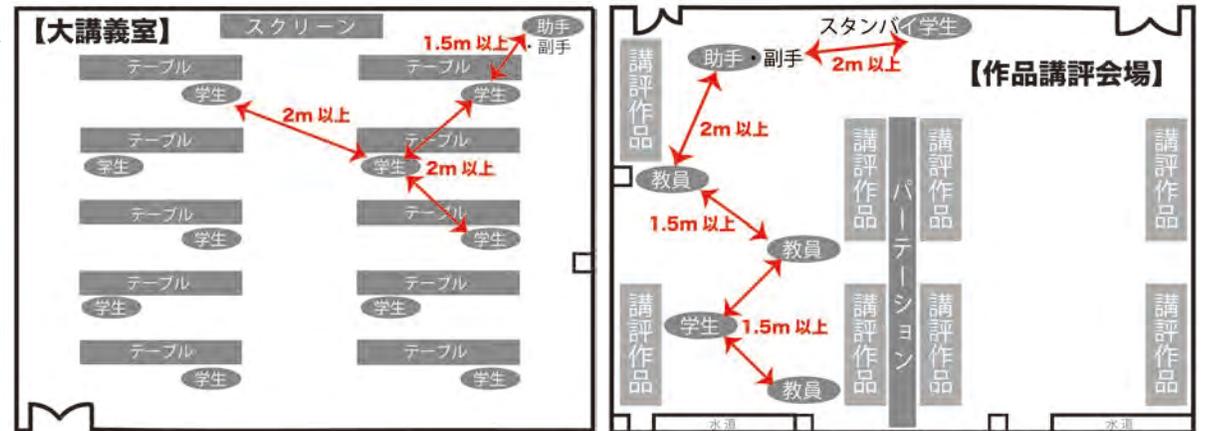
・遠隔指導

GCへ前日までに制作した作品画像の提出を行ってもらい、教員はそれを確認しながら電話やMeetにて指導を行った。また、導入、レクチャー、講評などの際にはMeetで対面授業に参加してもらった。



〈3、4年次対面でのアトリエ配置〉

各スペースとの間は1~2m以上は距離があり、作品の掛かったイーゼル等で仕切りの役割も果たしている。



〈対面・遠隔での4年次講評会〉

作品会場へは講評を受ける学生と次にスタンバイしている学生、担当教員と助手・副手のみ居る状態。他の学生は大講義室でスクリーンに映る講評会の様子を視聴し参加する。遠隔の学生もMeetから同時参加する。

***いずれも十分に感染対策を行った上での対面授業が可能であり実施できた。**

1. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業形態の運営方針

〈3年次・4年次の授業と講評風景〉



〈3年次のアトリエの様子〉



〈4年次卒業制作
講評会の様子〉



〈4年次のアトリエの様子〉



2. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業に伴う問題点

絵画コースでは、以上のような方針に基づき、「対面」・「遠隔」の両方の対応をしながら授業実施を行ってきた。しかし、同時に対応しながらであるからこそ生じた問題もいくつか挙がった。その中でも特に重大であると考えられる事例、今後問題となるであろうと予測される事項を以下に提示する。

〈問題となった事例〉

1. 本人からの希望で遠隔受講していた学生から、課題途中での対面受講への変更希望申し出の対処
または、その逆パターン（対面から遠隔）
2. 段階的な制作工程を踏む課題において、遠隔ではできない内容を含む際の代替案と計画面でのズレの修正
3. 普段の制作の様子が伺えない遠隔受講者への十分なフォロー

〈今後問題となると予測される事項〉

- ・ 遠隔対応がこの先数年後も続いた場合の遠隔用課題の脆弱化
- ・ まとめ

3. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業に伴う問題点の対処例

〈問題となった事例1〉

「本人からの希望で遠隔受講していた学生から、課題途中での対面受講への変更希望申し出の対処
または、その逆パターン（対面から遠隔）」

〈1年次生からの申し出に対する対処〉

「絵画II」の途中で、対面で受けていた学生が感染拡大により不安を覚え、遠隔に切り替えたいとの申し出があったが、課題内容が油彩でモデルを描く課題であり、尚且つ、当学生はすでに油彩に入って後半に差しかかるという段階であったため、遠隔に切り変えてもモデルを描く課題は継続することができず、新たに自画像課題を行うには時間が足りないため止む無く申し出を断った。タイミングによっては可能な事例ではあるが、課題内容とタイミングが合わなければ判断が難しい事案である。

〈4年次生からの申し出に対する対処〉

「卒業制作」のほぼ終盤に近い段階の途中で、遠隔を希望して受講していた学生が、自宅が狭くなったため対面に切り替えたいとの申し出があったが、人数の多い学年であり、尚且つ、ほぼ終盤ということもあったため、空いているスペースがなく止む無く申し出を断った。スペース的な問題を含む難しい事案である。

3. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業に伴う問題点の対処例

〈問題となった事例2〉

「段階的な制作工程を踏む課題において、遠隔ではできない内容を含む際の代替案と計画面でのズレの修正」

〈2年次「絵画基礎II」内の「テンペラ」課題における事例〉

この課題は毎回の制作工程が異なり、遠隔では行うことが不可能な内容が含まれている。これに関しては、予め処置済みのものを郵送することにより解決できるが、対面授業との工程にズレが生じてしまう。このズレを解消するために、レクチャーはMeetで参加してもらうも、その後は実際の作業は行わないため、デッサンをし続けることで対面授業の計画と足並みを揃えることを行い、解決させた。

【対面スケジュール（抜粋）】

授業計画		【対面スケジュール（抜粋）】	
月日	No.	テーマ	内容(凡例:青字=遠隔者Meet/赤字=text参照)
6月17日 木曜日 (1日目)	1,2	導入 制作の準備 準備1～下地作り1～ モチーフ組みの検討 制作の準備 準備1～下地作り2～ モチーフ組みの完了 デッサン1	【3限目】4-46教室(版画室)。以後も同じ場所 ①「絵画基礎II(テンペラ)」の授業概要と授業計画の確認、参考作品等の紹介、質疑応答 ②下地作り1-前膠処理-[text.P4参照] (*遠隔の学生は①②についてMeetで参加する。) ③追加モチーフの確認とモチーフ組み 【4限目】 ④下地作り2-綿布貼り-[text.P7参照] (*遠隔の学生は④についてMeetで参加する。) ⑤モチーフ組みの決定 ⑥八切り画用紙へのデッサン [text.P15参照]
6月18日 金曜日 (2日目)	3,4	制作の準備 準備1～下地作り3～ デッサン2	【3～4限目】 ①下地作り3-白亜地の塗布1(1層目)- [text.P4～5参照] (*遠隔の学生は①についてMeetで参加する。) ②下地の乾き待ちの間にデッサンの続きを行う ③白亜地の塗布2(2層目) ④下地の乾き待ちの間にデッサンの続きを行う

対面2日目では、「白亜地の塗布」→「下地の乾き待ちの間にデッサン」→「白亜地の塗布2回目」→「下地の乾き待ちの間にデッサン」の手順

【遠隔スケジュール（抜粋）】

授業計画		【遠隔スケジュール（抜粋）】	
月日	No.	テーマ	内容(凡例:青字=Meet/赤字=text参照)
6月17日 木曜日 (1日目)	1,2	導入 制作の準備 準備1～下地作り1～ モチーフ組みの検討 制作の準備 準備1～下地作り2～ モチーフ組みの完了 デッサン1	【3限目】 ①「絵画基礎II(テンペラ)」の授業概要と授業計画の確認、参考作品等の紹介、質疑応答 ②下地作り1-前膠処理-[text.P4参照] (*①②についてMeetで視聴参加する。) ③追加モチーフの確認とモチーフ組み 【4限目】 ④下地作り2-綿布貼り-[text.P7参照] (*④についてMeetで視聴参加する。) ⑤モチーフ組みの決定 ⑥F8号スケッチブックへのデッサン [text.P15参照]
6月18日 金曜日 (2日目)	3,4	制作の準備 準備1～下地作り3～ デッサン2	【3～4限目】 ①下地作り3-白亜地の塗布1(1層目)- [text.P4～5参照] (*①についてMeetで視聴参加する。) ②デッサンの続きを行う

遠隔2日目では、「白亜地の塗布をMeetで視聴」の後、実際には下地作りは行わないため、そのままデッサンをし続ける手順

3. 「対面・遠隔ハイブリッド型」授業に伴う問題点の対処例

〈問題となった事例3〉

「普段の制作の様子が伺えない遠隔受講者への十分なフォロー」

〈3年次生の作品紛失事件への対処〉

「絵画表現Ⅳ」の授業で、遠隔受講学生が自身の判断で自宅近くの公園でシートを敷き制作を行っていたところ、ある日突然作品もろとも紛失してしまったという事件が起きた。盗難なのか、廃棄されてしまったのか原因は未だ不明であるが、制作途中であった作品は結局戻っては来なかった。

作品の内容は外の風景ではないため、本人から作品を紛失してしまったことを相談されるまでは他の担当教員は誰も公園で制作していたとは思わなかった。課題提出に関しては、新たに作品を制作することで解決できたが、遠隔という普段の制作の様子が伺えない状況にある学生のフォローをどこまでできるかが改めて問われる事例である。

今後の課題点として、遠隔受講者の制作環境の十分な確認と具体的な計画案のヒアリングを行っていく必要があるだろう。

〈今後問題となると予測される事項〉

「遠隔対応がこの先数年後も続いた場合の遠隔用課題の脆弱化」、及び「まとめ」

新型コロナウイルス感染症の新たな変異株が生まれ続けている昨今、なかなか終息の目処が立たない状況が続く中で、遠隔授業の対応も対面授業と並行して行われ続けていくと思われる。そうした中で懸念されることが、遠隔対応課題の発案的限界であろう。遠隔ではできない、美大だからこそできる、対面だからこそ価値が生まれるという側面があることを否定できない。そういったことを考えると、早く終息してくれることを願うばかりである。

しかし一方で、遠隔でできる課題内容を考えることを諦めてはならない。遠隔だからこそ良い作品が生まれたという事例も時として起こり得る。対面と遠隔、その両側面からの可能性から新たな可能性を導き出していくことが、これからの新たな価値を生み出していくきっかけになるのではないかと考えている。

2021年度 授業研修会資料 彫刻コース

本年度、彫刻コースでは、全学年で対面式授業を基本として行なった。新型コロナウイルス感染対策を講じつつもコロナ禍以前の形に近づけることを目標に授業運営に望み、僅かながら以前の活気が戻ってきた様に感じている。

本年度に限らず、2年次には素材を扱う基礎的な技術力、3年次には表現の質を高めるための思考力や発想力、4年次には自分だけの表現を自ら探求する力の獲得に重点を置き、各カリキュラムを組んでいる。

2年次

+ 技術力

3年次

+ 思考力・発想力

4年次

+ 自己探求力

2年次：彫刻基礎 ～技術力の獲得～

モデル塑造・陶彫刻・石彫・木彫・金属彫刻という彫刻の基礎的な素材や技術を網羅的に履修し、表現の基礎となる技術力の獲得を目指す。可能な範囲で1つの期間に2つ以上の課題が重ならないよう、限定されたタスクに集中して取り組めるように配慮した。

モデル塑造



陶彫刻



木彫



石彫



金属彫刻



3年次：彫刻表現 ～思考力・発想力の獲得～

モデル塑造・石彫・木彫などの基礎素材の発展的な実習に加え、ガラスやブロンズ、水性樹脂（ジェスモナイト）などの特殊素材の実習を通して表現の幅を増やした。また、現代美術作家3名を講師に招き、レクチャーと実習を通して、個々の作家が自ら探求した新しい表現や考え方に触れ、思考力や発想力を養う授業を行なった。

ガラス彫刻



ブロンズ



水性樹脂
(ジェスモナイト)



現代彫刻演習



4年次：美術研究・卒業制作 ～自己探求力の獲得～

3年次までに獲得した技術力や思考力・発想力を礎に、習得した技術を深め自己表現へと発展させる正統派と、習得した技術に縛られることなく、自己表現に相応しい表現技術や素材等を自ら探求する革新派。可能な限り、どちらのニーズにも応える形で対応し、学生が自ら探求していきける力の獲得を目指した。

これまでに習得した技術を深める

～3年次までで学んだ木彫を研究した例～

美術研究



卒業制作



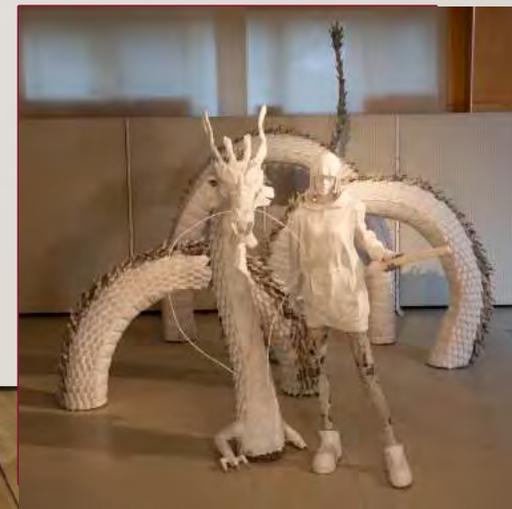
自己表現にふさわしい新たな表現を求める

～紙を素材にした独自の技法を研究した例～

美術研究



卒業制作



改善点

- 学生の技術力と意欲が年々高まっており作品の規模が拡大し質も向上した
- 人数の多い3年生は課題を2グループシフト制にしたおかげで、制作空間とソーシャルディスタンスの確保の両立が図れた
- ガイダンスで連絡のルールを伝えたことにより、学生からの勤務時間外連絡が削減され、教職員の負担が軽減した
- 一部専門の道具の購入を義務化したことにより学生の道具の扱いが改善した
- **GC**や**Slack**などを活用し教職員間や学生と以前より情報共有が円滑に行えた

今後の課題

- 時間割を調整し、1つの課題を連続した期間で取り組めるようにしたが、モチベーションの持続と時間配分に注意が必要となった。
- 安全性の確保のため道具の扱いに関する免許や技能講習をより多くの学生・教職員が受ける必要がある
- 発表の場や機会が不足している
- さらに購入を義務化する専門道具を増やすか検討が必要である
- 作品サイズの拡大や学生数増加により作品の保管場所が確保できなくなりつつある

クラフトコース

2021年度 授業研修会用資料

太田正明

昨年度のコロナ禍による遠隔授業では対面授業との積める経験値の差に圧倒的な開きを感じ、本コースは対面授業を基本として今年度の授業運営とした。**クラフトコースは金工と木工の二つの分野の専任教員の配属体制が昨年度から始まり**、素材に対する知識と技術の専門性をより深めた専門性の高い学生を輩出するために、学生の意識改革とカリキュラムの編成をおこなった。本コースが今年度に推進してきた「**卒業時にクラフト力を持つ人**」を育成することを目標とした授業の研修資料である。

クラフトコースの育成

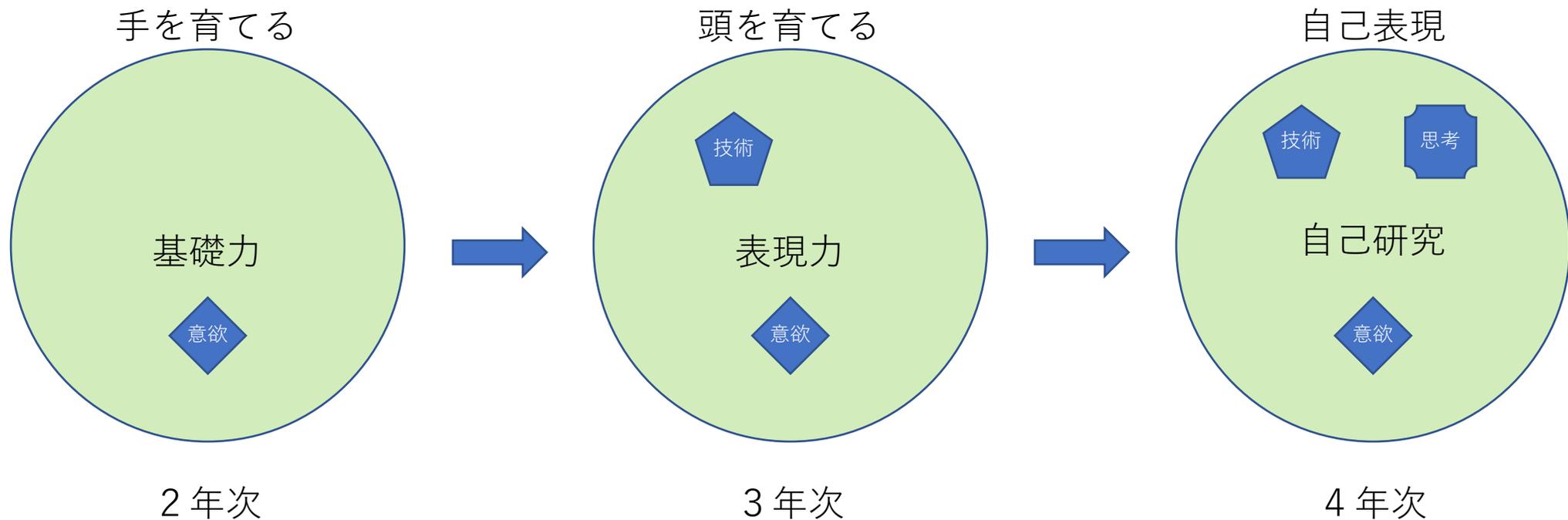
モチベーションと意識

問題点と改革

成果と改善

クラフト力=自分で考え自分でつくりだせる力

自分で考えたことを自分でつくるというのは美術大学では当たり前のことの様に思うが、多くの学生が初めての素材の扱いに苦労して思うように作業が進まない体験をする。「あれを作りたい。これを作りたい。」といった意欲は2年次では達成できないが、3年間で積み上げる経験を糧に卒業時には自分でつくりきる知識と技術を修得した学生が育つ。



以前から抱えている問題点

以前のクラフトコースでは金工分野と木工分野のを横断的に学習する目的でカリキュラムが組まれており、コース選択後3年間の期間で**技術と知識の蓄積が十分に備えることが難しく**、卒業時に自分で判断してものをつくるほどの専門性は**いまひとつ足りていない**ように感じていた。

以前のカリキュラム



どっちもやろう！



素材表現別にクラス分け



年間通してやりきる！



現在のカリキュラム

2年コースガイダンスで数年後の自分を思い描く

コース選択後に卒業制作は何を作りたいかを想像します。この段階では少し早いように思いますが、**自分の興味を意識しながら**を数年後の自分を思い描いて2年次の基礎技術を修得するところに意味があります。

2年次ガイダンスで使用資料の一部
2年次生が置かれてる位置

1:クラフトコースの学び

1年次：素材体験

C系3コースの造形基礎を習得

2年次：基礎技法習得

木工、金工の基礎技法を習得

3年次：表現技法習得

テーマに対して各自のコンセプトで制作

4年次：表現技法の探求

4年間の集大成として自己表現の確立 → 卒業制作

← イマココ

← 表現する素材・技法を選択

1:実習について

	クラフト表現Ⅰ	クラフト表現Ⅱ	クラフト表現Ⅲ	クラフト表現Ⅳ
3	佐藤 / 丸山、太田、松村 ①イメージ表現 ドローイング リモート ②工芸技法（木工、金工）	佐藤 / 丸山、太田、垣本		
4	美術研究Ⅰ 丸山、太田 齋藤、佐藤、松村	美術研究Ⅱ 丸山、太田 佐藤、松村	卒業制作 丸山、太田 佐藤、齋藤、松村	

表現する素材・技法を選択

2年次は技法習得の修行。自由度はあまりない。

3年次で素材の選択

しっかりした仕事ができる様に技術を伸ばす



できることが増えて表現の幅が増える

3年次は基礎技術を活かすために表現力を伸ばす

NEW 柔軟なイメージ力を養い表現の幅を増やす課題を導入

クラフトコースの学生の特徴としてイメージしたものを描く機会が少なく苦手としている傾向にある。一つのものを作るのにコツコツした長時間の作業が必要だからこそ、週に4回ある授業のうち1回分は素材を触る時間を減らして頭の中にあるイメージをブラッシュアップしたりアイデア練る時間を増やした。

クラフト表現 (イメージ表現)
----- 100枚ドローイング ----- クリックで開く
てらおなぎさこい
「自分の好きな物やこと、興味があるもの、美しいと思えるものを題名をつけて100枚ドローイング(表現)する」
遠く木洩れ日
501
心の中
501



4年次では修得した技法と表現を研究する

4年次春には卒業制作で作るものを明確にしていきます。2年次に描いていた作りたいものが自分で作れる力を持つ学生もいれば、当時に描いていた作りたいものがクラフト制作を知ることによってアップデートされて変わる者もいます。どちらも目標を持ってモチベーションを良い状態にしたからこそその結果なので良い傾向と言えます。美術研究Ⅰ、Ⅱでは卒業制作までに自分に何が足りないのかを考え、試行錯誤を繰り返して卒業制作の集大成の下地を作り方をします。

美術研究の様子

クリックで開く



成果

イメージ

実験

イメージと実験のやりとり

トラリー 資料集め

Sybil(シビラ)

工業アイザワ 純銅洋食器

卒削の方向性

イメージ

モチーフ：ツリガネソウ

【スケッチ・分析】

- ・中心の茎
- ・枝分かれしている細い茎
- ・葉
- ・花
- ・ガク

茎部分：銅棒(5mm.2)

花部分：銅板(1mm.0)

食塩を用いた仕上げ処理

10%程度の食塩水に銅を漬けて1週間程乾燥させると表面に塩の結晶が付着し、時間が経つと緑青が発生して白みがかかった緑色の発色になる。

このやり方だと天候に左右されることがあるため、露吹き

現状で分かっていること

- ・塩分、湿度、観葉の条件
- ・比較的早められる。薬剤
- ・クリアマットの塗料を吹

改善点:

- ・火災が心配になるの
- ・塩の管理が雑だと道具が

9/28

だいぶタンポポらしき形になってきているので、細部を詰めた。ガクの部分をどうするかで一本当たりの作業時間が変わってくる。

ヤニ台でガクの細かい造形を整えてから花部分と組み合わせ、ボールで2.0mmの穴を開けておく。

2.0mmの銅棒の先端を糸鋸で4等分にし外側に開き、良い塩巻の高さで抜け防止丸カンを取り付ける。

6/8 穴-Oハップでの酸化について

酸化をマスキングで防げるかの検証:

養生テープ

マスキングテープ(木、金属塗装用)

どちらも酸化防止になり、色味もおおまか同じ仕上げ。養生テープの方は若干断面の幅さが気になる。

養生

マスキング

ツリガネソウの手直し

茎を一旦外して5mmのものに差し替え、3分程で口挿。

だいぶタンポポらしき形になってきているので、細部を詰めた。ガクの部分をどうするかで一本当たりの作業時間が変わってくる。

カリキュラムと学生の意識

・素材の専門分野に特化したカリキュラム編成は修学効果が高くカリキュラムモデルの3年次は自分で作り上げる力と質の固い作品が出来上がっているので来年度を期待したい。コース内でクラス編成したことによる学生に対しての専門的な指導教員の不足を専任教員が担当コマ数以外で補う状態である。自分でつくる力がつけばこの状態が緩和すると願いクラフトコース学生の意識改革に励んでいる。また、これまでの汎用的に他素材の特性を知る機会を奪われてしまったので、**他素材選択学生の作業工程を共有し、知る機会を保つ制作ノートを作ることでカバーした。**[木工選択の作業ノート](#) [金工選択の作業ノート](#)

コロナ禍での対面授業と教室の状況

・去年度のコロナ禍の成果を判断してクラフトコースでは対面授業を推進していた。学生からも対面でも希望が多く人数の今年度は2年生の大幅増加により場所の確保が必要となりPCなどが置いてある**実習室を簡単な作業ができる工作室として改装した。**人数が増えたことにより密な状態もあったが換気などの基本的対策で感染予防をして感染を防ぐことができた。授業外学習は自宅作業が厳しいため授業外作業を教室で作業することを研究室の判断で認めているので実質的には2年～4年までが工房内で作業している状態で在籍人数以上の指導と管理の負担が必要になる状態が続いている。ティーチングアシストの制度もあるが現状は予算的に厳しく、現在は専門性を持って自分で作ることができる学生を育て下級生と**同じ興味の共通点を持つ学生間で切磋琢磨する**ことができる作業環境を期待している。

卒業後の進路

・モノを作ることに興味のある学生が多いクラフトコースでは卒業後も制作関係の進路先を志望している。**クラフトコースとしてもモノづくりができる環境に学生の活躍を望んでいるので進路の開拓を進めたい。**世の中はAI化が進んでいる流れだが、一方では手で作ることを求めている層もある。そういった進路先が求めている人材は発想力と細部までクオリティを求め作れる人材である。今年度は12人中9名が1月現在で就職の進路を決め、内2名は教員の採用、内3名は造形師、家具制作、舞台美術と制作に携わる就職先を決めた。**本コースの取り組みである考えて作れる人材教育とキャリア教育による早い時期からの進路についての意識づけが相まり一定の成果になったと思う。**本学のキャリア支援委員会のご尽力にも感謝したい。

アジェンダ

1:PDコースの課題

2:新たに開始した授業含む年間カリキュラム構成

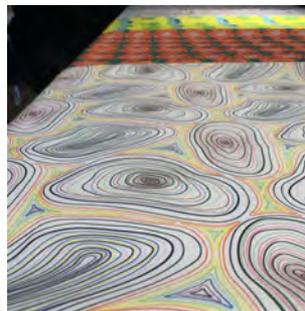
3:新規開設授業の説明1 (PD基礎技術習得授業)

4:新規開設授業の説明2 (金沢動物園連携授業)

5:新規開設授業の説明3 (デジタルファブリケーション導入授業)

6:新規開設授業の説明4 (XDを導入したアプリ提案授業)

7:上記授業及び年間運用授業の成果・効果と課題。今後の計画



1:PDコースの課題

FY20以前の学修状況

■デザインを真剣に学ぼうとする意識の不足

受験淘汰を経ず、また1年次の複合教育でPDの基礎教育やPDに対する意識が不足している事実と合わせて、そもそもPDを志望する入学生が少なく消去法でPDを選択する傾向がその要因であると認識。

■デザインを学ぶための基礎表現力の不足

受験淘汰を経ず、また1年次の複合教育でPDの基礎教育やPDに対する意識が不足している事実と合わせて、そもそもPDを志望する入学生が少なく消去法でPDを選択する傾向がその要因であると認識。

■制作物の精度不足

上記2点の要因とも共通性があるが、作る意欲や制作時の集中力、作り方が解らない、作り続ける事が出来ない、、、ために、制作精度が上がらない状況もあると認識

■調査分析からのアイデア展開力の不足

基礎力を高めようとした経験が圧倒的に不足していて、調査分析の意味やその方法が理解出来ない状態。アイデア展開も、、外を見ようとして今ある自身の引き出しにのみ頼る傾向があり、展開力が決定的に足りない状態。

■デザイン推敲に時間が避けない

PDの全ての工程及び基本的表現力が不足しているため、各工程で停滞が発生し、十分な推敲がされず未消化のまま次の工程に進み、結果的に手戻りも増え、提案の精度が上がらない状態。

■論理的思考力不足

全ての事象を直感的な感覚で判断し、深掘りをしない傾向（習慣？）がある。本を読む習慣が無く、言語での考察能力や表現力、加えて語彙力が乏しい事も、原因と考えられるが、学生本人のデザイン推敲に必要な論理性や教員の指導の理解力に不足があると認識。

FY21の課題の要約

- デザインの基礎力を高めることで、高年次の課題でスムーズな制作作業が行える状況を作り、本質的なデザイン推敲の質と量を高める必要がある。
- 達成感や納得感を高め、PDに対するモチベーションを向上させる必要がある。
- 論理的思考や客観的思考を育む（促す）仕組みの導入が必要。
- 安全で高精度加工ができる工作環境（施設と設備）を整える必要がある。
- すぐ作る作り続ける習慣づけと、その蓄積による成長を実感する（自信にする）仕組みと指導が必要。

2年次

PDの基礎素養を養う

立体造形の基礎を集中的に学ぶ基礎Iを皮切りに、PD手法を体感する基礎II。CMF デザインとイラレフォトジョスキル会得の基礎III。3Dスキルを高め、曖昧なテーマから提案に結びつける基礎IVまでの流れで、PDの基礎素養を習得する。

PD基礎 I 新設

■PD必須の基礎素養を養う短期集中実技習得課題群



PD基礎 II

■初めてPD手法で回す授業。段階ボールスツール



PD基礎 III

■CMFを学ぶ授業
CMF & ファブリックデザイン



PD基礎 IV

小幅
変更

■曖昧な言葉から発想する
(デジタルファブリケーション積極活用)



3年次

PDの領域を広げる

PDの扱う領域は、道具や家具インテリア、公共空間。そしてUI・UXまで幅広いため、3年次に各テーマの課題を設定。それぞれの課題で、ユーザーとの向き合い方や条件や状況の中での検討の進め方の違いと共通性を学ぶ。

PD表現 I

■個人から発想する
パーソナルプロダクト



PD表現 II

小幅
変更

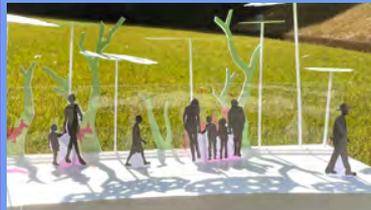
■人と人の関係から発想する
シェアプロダクト



PD表現 III

大幅
変更

■環境から発想する
パブリックデザイン



PD表現 IV

小幅
変更

■UI・UXから発想する
XDを用いたアプリのデザイン



4年次

PDの学びを応用した自発的な創造活動

美術研究 I

卒制に繋がる基礎調査・実験

美術研究 II

卒制に繋がるプロトタイプング

卒業制作

3:新規開設授業の説明1 (PD基礎技術習得PG)

2年次 PD基礎 | 新設

■PD必須の基礎素養を養う短期集中課題群

■背景・主旨■

ここ数年の学生の制作状況から、PDコースの教育に必要な**基礎造形に関する知識と経験が不足**していると判断。

専門教育の開始年次(2年次)の最初の演習として、**様々な素材と加工方法の体験**を通じて、以降のPD演習での制作に必要な**立体造形及び立体推敲の基本素養**を養う内容に変更し実施した。

■成果■

7.5週の間、20種類弱の素材と加工法を「短期集中的」「大量継続的」にこなす事で、素材工法の**知識の会得・手技の会得修練・集中してとことんまで造る習慣**と意識が高まり、**2年次の3つの演習**での各チームでの作業量の増加と・モックアップ作成頻度・最終モックアップの**精度向上に繋がった**。

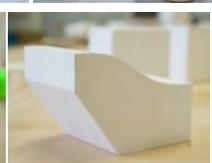
■工夫点・改善点■

各素材や工法のチュートリアル&テンプレを準備し、目的の成果を達成しやすい状況を作った。時間を短めに区切り、目標を明確にすることで、飽きずに作業に取り組める状況を作った。考察時間を排除し単純作業(手技習得のための)に集中できる状況を作った。単純作業でも楽しみを見出し易く、達成感の持てる目標と成果物の質を設定した。

次年度は、今年度の**停滞箇所を改善し、効率化合理化**する。出来た時間の余裕を更に別の課題を**加え、本授業の学びの最大化**を目指す。



№	月日	演習の目的概要	課題 (ステータ)	各回テーマ (3回)
1	4月19日	立体化の初歩的素材と加工法習得	ステンレボード 模型	●ステレンボードの加工 ●基本造形要素(円、角、線、面、点、面)
2	4月20日			加工型製作(1) (3D)
3	4月22日			加工型製作(2) (より複雑な形状)
4	4月23日			加工型製作 (3) (造形と丸みのあるステレンボード)
5	4月26日			ステンレボード造形習得 (3D) 粘土造形基礎習得 (4D)
6	4月27日	粘土造形	粘土造形	課題1 (ビーム)
7	5月6日			課題2 線の手摺り一体化 (距離で線幅の調節)
8	5月7日			Appleマストクス (ドーナツでもできる)
9	5月9日			課題3 線の手摺り一体化 (距離で線幅の調節)
10	4月11日	スタイロ造形	スタイロ造形	課題 Appleマウス 型紙から作り出す
11	5月13日			課題 Appleマウス 型紙から作り出す
12	5月14日			課題 Appleマウス 型紙から作り出す
13	5月17日	網編み材料と加工法習得	クモッド型網 (著名スプーン模倣)	課題 スタイロ造形習得 (3D) クモッド加工基礎習得 (4D)
14	5月18日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
15	5月20日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
16	5月21日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
17	5月24日	様々な素材と造形法習得	様々な仕上げ処理 (磨き)	課題 網編みスプーン型紙 網編み
18	5月25日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
19	5月27日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
20	5月28日	造形物の2次加工法習得	塗装・パキユーム	課題 網編みスプーン型紙 網編み
21	5月31日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
22	6月1日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
23	6月3日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
24	6月4日	造形物の表面処理法習得	仕上げ磨き・磨き	課題 網編みスプーン型紙 網編み
25	6月7日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
26	6月8日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
27	6月10日	仕上げ磨き・磨き	仕上げ磨き・磨き	課題 網編みスプーン型紙 網編み
28	6月11日			課題 網編みスプーン型紙 網編み
29	6月14日	仕上げ・発表準備	仕上げ磨き・磨き	課題 網編みスプーン型紙 網編み
30	6月18日			課題 網編みスプーン型紙 網編み



限られたスペースと備材不足により安全衛生上の懸念が浮き彫りとなる

3年次 PD表現 II

■人と人の関係から発想する
シェアプロダクト

■背景・主旨■

クラフトコースとPDコースの**人数が増えた**為、今まで使わせてもらっていたクラフトコースの木工室を利用する事が出来ない状況もあり、**工房機能が脆弱なPDコースでは従来の運用が不可能**になった。時節から、デジタル加工技術導入の機運も高まっている状況で、**外部デジタル加工施設を利用**したカリキュラムに変更し、デジタルリテラシー向上と制作物の精度及び速度向上を目指す内容とした。

■成果■

苦肉の策で始めたカリキュラムであるものの、今まで不足していた図面化能力が向上し、制作物の精度も高まる結果となった。また自身で加工する時間が短縮できた事で、**デザイン推敲にかけられる時間も増え**、総じて評価の高いアウトプットとなり、学生自身の**達成感も増した**と思える。

■工夫点・改善点■

学内での制作環境が整わないPDコースでは、**常に加工始めた制作場所の確保で悩む**事が常態化。本授業は、学外施設利用で解決し学びの効果は得られたものの、**学生の負担**も多く、**加工後の学内作業スペースの狭さは問題**であり、PDコースの加工制作環境の拡充と整備は大きな課題と言える。

今年度、他大学で**卒制制作時の死亡事故**を踏まえ、コースを超えた場でも真剣に検討して行きたい。



学内での制作環境が確保できない為、学外施設を利用する事とした。
(ご協力: 蒲田 koka様)



Koka様での制作状況。苦肉の策ではあったものの、精度の高い加工とデジタルファブリケーションツールを本格的に体験できた事が、各学生のモチベーション向上に繋がった



6:新規開設授業の説明4 (XDを導入したアプリ提案授業)

3年次 PD表現 IV

UI・UXから発想する XDを用いたアプリのデザイン

■背景・主旨■

プロダクトデザインの扱う領域は増え、近年の傾向を見てもUI・UXもその範疇である事は間違いない。PDコースでは発足時からこの見解の元本授業を設定して来たが、本年度はさらに積極的に改善した。課題のアウトプットにXDを導入し、より本格的なUI・UXデザインの推敲を行う事で、直感的で情緒的な学生の思考を論理的な思考と結びつけ、より具体性のある提案に結びつける計画とした。

■成果■

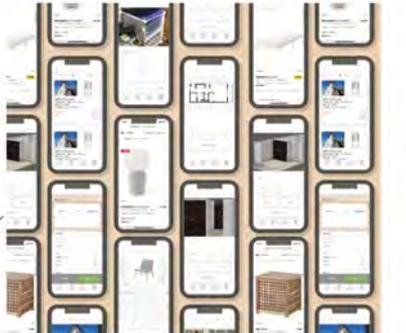
アプリケーションの提案を通じて、プロダクトデザインの骨子と共通する「UX」、つまり、ユーザーの指向や行動を細かく観察分析し合理的なテーマを見つける事の重要性を認識できた感触を、そのデザイン推敲状況やアウトプットから確認できた。また、自身の提案の仕組み全体を俯瞰してみる体験を通じて設計や図面の重要性への気づきも得られた。総じて、最終成果物及びその推敲過程は評価の高いものとなり、学生自身もUI・UXに対する興味を持ち、卒業後の進路候補に挙げる傾向が高まった。

■工夫点・改善点■

本学学生にとって不足傾向の描画能力をデジタルツールで補い製作時の停滞を防ぐ狙いは功奏。今までデザイン推敲に費やせなかった時間を確保できた。次年度は、UXの指導内容に厚みを持たせ、骨子の部分及びグラフィック表現 (UI)での質の向上を目指したい。



不動産が提供する引っ越し検索シミュレーション



7:新規授業及び年間運用授業の成果・効果と課題

FY20以前の学修状況

- デザインを真剣に学ぼうとする意識の不足
- デザインを学ぶための基礎表現力の不足
- 制作物の精度不足
- 調査分析からのアイデア展開力の不足
- デザイン推敲に時間が避けない
- 論理的思考力不足

課題要約

デザインの基礎力を高め、高年次の課題でスムーズな制作作業が行える状況を作り、本質的なデザイン推敲の質と量を高める必要。達成感や納得感を高め、PDに対するモチベーションを向上させる必要。論理的思考や客観的思考を促す仕組みの導入が必要。

FY21の学修計画

- 2年次冒頭でのデザイン基礎素養底上げ
初段階で立体造形に関する知識と技術を会得し、以降の課題で立体検討及び最終成果物の精度と速度をあげる。この時間短縮が本質的デザイン推敲やファイナライズ段階の推敲時間確保に繋げる計画
- 2年次・3年次のデジタルスキル向上計画
スケッチ表現力・立体表現力・図面作成力が不足している学生に、上記3要素を合理的に扱えるデジタルスキルを会得させ、各段階の精度と速度の向上を期待。
- インクルーシブデザイン（金沢動物園連携）
第三者と共同でデザインを進めることで、リアルなユーザーを対象にした調査分析の重要性に気づかせ、提案の合理性と精度を高める計画。
- 情緒的思考と論理的思考の融合
デザインの作業では、人間らしい発想を論理的にまとめる必要があるが、例年本学学生は苦手とする。アプリデザインの課題で、XDを使う事で情緒的な発想を論理的に捉えられる事を期待。同時にデジタルツールの表現力でアウトプットの質の向上を期待。

FY21の学修効果

- 制作物の精度向上（2年・3年）
2年は立体化のノウハウと作る習慣を会得し、3年はデジタルスキルが向上し、各学年ともに各課題の最終成果物の精度が高まった。同時に、調査分析及びデザイン考察や推敲の精度も若干向上傾向。
- PDを学ぶ姿勢の向上（2・3年）
2年初期課題や3年表現IIのデジファブ課題などで、自身の提案の高精度な可視化手法とその効果を体感し、精度の高いアウトプットによる「やりがい」や「達成感」が得られた様子が伺え、取り組み姿勢とのその精度に向上傾向を確認出来た。
- 論理的客観的思考の向上（主に3年）
金沢動物園との課題では他者へのインタビューや提案の説明を通じて、また、全体像を俯瞰しながら描くXDを使用したアプリケーション課題を通じて、論理的な思考が着実に着いている。
- デザイン推敲にかける時間増加
PDに必要な基礎スキルが向上した結果、今まで時間がかかっていた途方に暮れる時間が減少、また、3Dプリントによる迅速な試作作成が可能になり、相対的にデザイン推敲にかける時間と精度の向上が見られた。

FR22以降の改善と教育計画

1：各授業及び連携の精度向上

今年度の実施で、各課題の効果と各授業間の連携効果を確認できたので、各授業及び各授業間の連携運用の内容や方法の推敲を行い、総合的な学修精度を高める。

受験淘汰を経ない所以の意欲不足やスキル不足、1年次の専門教育不足を前提として、早期のキャリアイメージ醸成を含め、気持ちと手技の両面で2年次から合理的に補い短期間で成長させる仕組みを確立する。

2：専門教員の採用で質と効率の向上

FY21の丁寧な指導運用で効果があった反面、常勤教員の高負荷が浮き彫りになった。

FY22は、各課題の実情に合った、細かい実技指導が可能な人材を新たに採用し、常勤教員の負担軽減を計画。常勤教員の負担軽減分は、全体の教育計画の推敲や本質的なPDデザイン指導及び、学生毎に異なる状況に合わせた個別対応の時間に充て、総合的な質の向上を目指す。

3：施設・設備不足の解消

各学年10名以上の学生を安定的に受け入れる事が常態化し、いよいよ作業環境（施設設備）の不足が顕在化。教員私物の提供で作業効率と精度を担保しつつ、飽和状態の工作空間で工夫しながら作業を行っているが、決して充足・安全とは言えない状態。コース裁量の枠を超えた抜本的な対策を検討したい。



この工房を30名で使う超過密状態。全学生が臨機に交代しながら使用するが、機械の上を物置代わりにも使うなど破綻している。抜本的な解決が必須と言える。



テキスタイルデザインコース

2021年度 授業研修会用資料

高瀬ゆり

今年度、テキスタイルデザインコースは基本全学年対面による授業を実施した。* 配慮願いの提出されている学生に関しては一部遠隔授業
昨年度の遠隔授業による実技の未習得・縮小は、今年度の指導に影響を及ぼし、学生の作品にも良かれ悪しかれ、その影響が出た。
昨年度の遠隔授業と今年度の対面授業についての差や影響についてまとめた

C系1年 テキスタイルと出会う

前期

染め: プリミティブダイニング
織り: フェルティング
* 遠隔授業(2020)

後期

染め: 捺染プリント
織り: 綴れ織り
* 染め・織り共通テーマ

2020前期遠隔授業では作品スケールが小さく、完成度が低くクオリティーが望めなかった。
後期から対面授業が復活したが、ソーシャルディスタンスを保つために織り機の間隔をあけるなど対策を施したために、従来使用する教室のチェンジにより他の学年の制作場所を圧迫した。(織り実技)他の授業にも影響した。
染工房も1人当たりの制作使用範囲が広い為、他の学年の制作場所確保が難しい。2021年度も同様。



2020(遠隔)
フェルトバッグ
(20cm)
GCRIにて動画、コマ撮り資料により指導



2021(対面)フェルトバッグ
(40cm)
GCRIにUPした資料も併用



プリミティブダイニングは自宅(遠隔)でも制作可能であったがクオリティは高くなかった。
2021年(対面)ファッションショー形式の発表

2年

テキスタイル技法の素材と基本を理解する コンピューターを用いた関連技術の基礎を学ぶ

前期

染め: 古典技法
織り: 布のクリエイション * 遠隔授業 (2020)
織り: 基礎 組織織り(2021)

後期

染め: インクジェットとマッピング
織り: 布のクリエイション
基礎 組織織り(2020)

2020年は遠隔で対応不可能な織り機使用授業を後期(対面)前期に遠隔でクリエイション授業を実施。家で可能な範囲の加工法に限定した。テキスタイル専用 PCソフト実習は後期授業に組み込んだ。
染め古典技法も自宅で制作可能な範囲までの作業工程にとどまり後期の対面まで待つことになった。



布のクリエイション
2021



古典技: 2020の遠隔では友禅技法を蒸し処理前まで行う。型染は型彫りまで。それ以降の作業は対面授業まで持ち越す。

3年

テキスタイル素材と技術を用いたデザイン力を伸ばし表現としてのテキスタイルの制作を行う

機能や用途を考え産業テキスタイルを学ぶ

前期

染め:テキスタイルプロダクト

織り:リピートプリント

*遠隔授業(2020)はデザインのみ

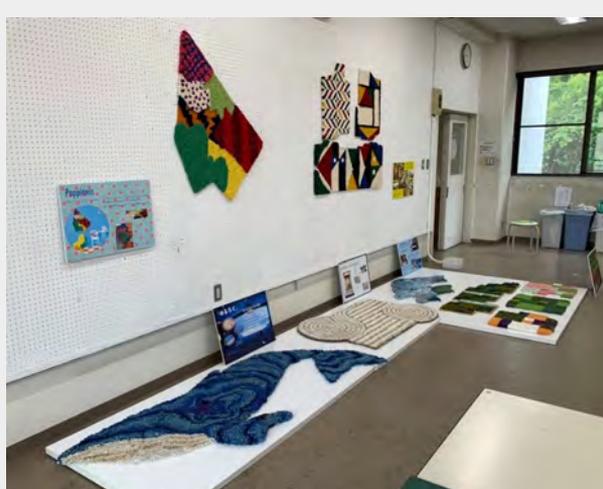
織り:フックドラグ カーペット講座

後期

染め:組織織り 染め:インスタレーション

織り:自由制作

遠隔においては染め実技(スクリーン捺染)は大型機材が不可欠の為、自宅でのデザインワークにとどまり、後期に実習とし、インスタレーションは想定図としてスケッチで完結とした。フックドラグは自宅制作のためサイズを縮小し作品数を増やした。工場発注の作品ができず、制作した作品を保育園に納品した。



2021 ラグ



2020 ラグ



2020前期遠隔はスクリーン捺染はデザインのみ、後期延期の為、インスタレーションを想定図までとする。



4年 卒業制作



2021年度卒業制作 作品例

昨年度の作品に比べてスケールが大きく、複数の技法を組み合わせた作品が増え、全体的に完成度の高い作品に仕上がった。制作に対する意欲が感じられる



← ↑
フックドラグとスクリーンプリントを組み合わせた作品

遠隔授業と対面授業

- テキスタイルは直に素材に触れ、確かめることから始まる。それゆえ技法における手加減が手わざに大きく繋がる。遠隔ではそのニュアンスを伝えることは難しい。
- 画像から作品の良し悪しを判断することに疑問を感じる。布における表現は直接、目で確かめ風合いをも確認する必要もあるからだ。
- サイズのスケール感を味わうことができない。テキスタイルは制作場所が大切である。狭い空間での作業には無理を感じる。テキスタイルは素材の特性ゆえ、形が定まらない自由度が逆に難しいところである。
- 遠隔授業での動画作成、データ作成は非常に役に立っている。GCRにアップした資料をみながら作業ができる。個人対応の指導が多い為(コロナ対策ではNGの接近戦になる)、情報共有がスムーズになった。

遠隔後の学生に感じたところ

- 遠隔授業での取りこぼし技法に対しての「やれなかった感」が強く伺える。それは悔しさも含み、「やってみたい気持ち」に強く繋がっている。テキスタイルは技法が多く、大学教育で全てを学ぶことは不可能だ。その厳選された技法ですら全てを学ぶことができなかつた悔しさを、3年次の自由制作～卒業制作に繋げている学生が目立った。遠隔による「不十分な習得気分」も感じた。リベンジ精神で、遠隔で満足のいく作品が制作できなかった分、頑張りたいという気持ちが現れていた。しかし、その逆もある。遠隔による「理解できなかった」技法について、諦めて挑戦する気持ち失せてしまい、再度「教えて欲しい」の態度もなく、「見切り精神」を感じる部分があった。対面復活後に、目標を失い意欲を失った学生もいた。コロナによる遠隔授業の後遺症なのかは不明だが、精神面で弱くなったと感じられる。

感染対策による制作場所の問題

- ソーシャルディスタンスを保つ為の、作業スペースを確保することが難しい。
機材、道具を使う作業になるので、一人の有する面積が大きい。それゆえ、授業教室のチェンジがおこり、他の授業(例えばコンテクストアーツ ファッションデザイン演習)の実施場所の大幅な変更がおこり、他のコースとの教室の奪い合いにもなりかねない状況だ。機材、道具の移動も大変であり、助手の負担も大きくなる。卒業制作を行う4年生を優先に作業場所を設定するが、それさえスペース確保が難しくなっている。換気、マスク着用を厳守しているが、密を避けることが授業内容によっては難しくなっている。



距離をとった制作風景



今後の取り組み

- 教室の狭さも起因しているが、学生の教室使用の整理整頓の意識が弱い。多学年混在教室であり、学年間のコミュニケーション不足も感じられる。コロナの影響もあり、以前よりも先輩後輩の交流が減ったように見受けられる。共存の場において、互いに譲り合うこと、助け合いこと、注意しあうことも社会性を身につけるには大切なことだ。基本的なことであるが、来季は各自の教室使用のマナーを徹底させたい。教室不足の現状はなかなか解決が難しいと思う。せめて教室の使い方において各自の責任感のもち方を徹底するだけでも違って来るだろうと期待する。4月の各学年のコースガイダンスを全ての学年を同時開催にした。自己紹介も含めて、お互いに学年と、顔を知ることが大切だと感じた。コミュニケーション不足の解決の一助としたい。
- テキスタイル産業、企業についての訪問・見学の機会がコロナ影響でなくなってしまったことは大きい痛手である。研修旅行の中止も大きい。産業テキスタイルへの理解は、授業課題の中で深めて行くことに努めて行く。
- テキスタイル産業への就職は新卒にとってはハードルが高くなっているのが現状だ。ポートフォリオの作成が遅れがちである。進路については早い時期に動くよう、これまで以上に指導が必要だ。

A photograph of a building at dusk. The sky is a mix of orange, yellow, and grey. In the foreground, there are dark silhouettes of trees. In the background, a tall tower with a lattice structure is visible. The building in the middle ground has some windows lit up.

V系・VCD

2021年度授業報告

田崎 冬樹

2021年度は専門科目が原則対面授業になったことで多くの学生が登校により授業を受けることができた。

一部体調に懸念のある学生や日本に入国できない留学生のために遠隔での対応も残しつつ概ね従来通りの課題内容で行っていくことができた。

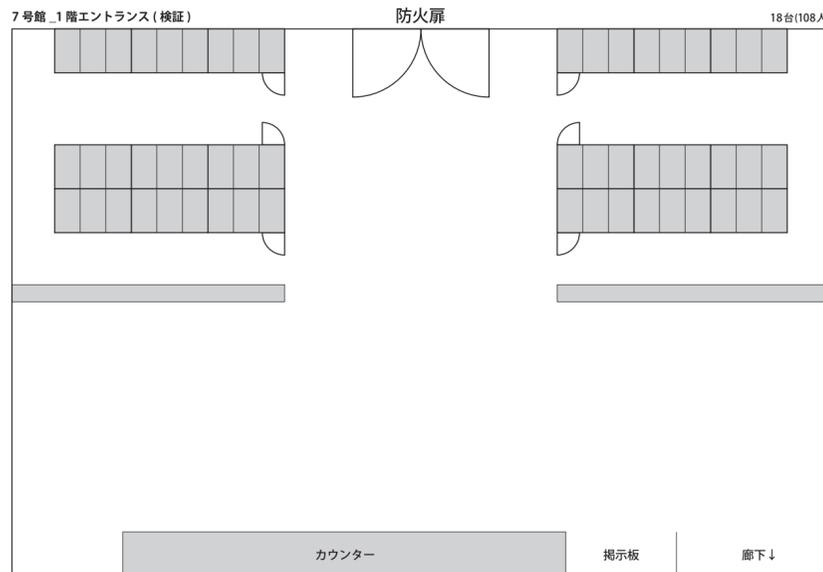
しかしVCD所属の学生で特に2年生はこれまでよりも人数が多かったために使用教室の入室を制限する観点からさまざまな工夫を余儀なくされた。

(以下各学年人数、対面時の使用教室を参照)

1年V系	156人	7-3A2	7-2A2	授業により一部 3号館、本館も使用
2年	50人	7-4C2	7-3A1	7-2B2(PC)
3年	32人	7-4A1	7-4A2	7-2B2(PC)
4年	36人	7-2C1	7-2C2	7-2B2(PC)

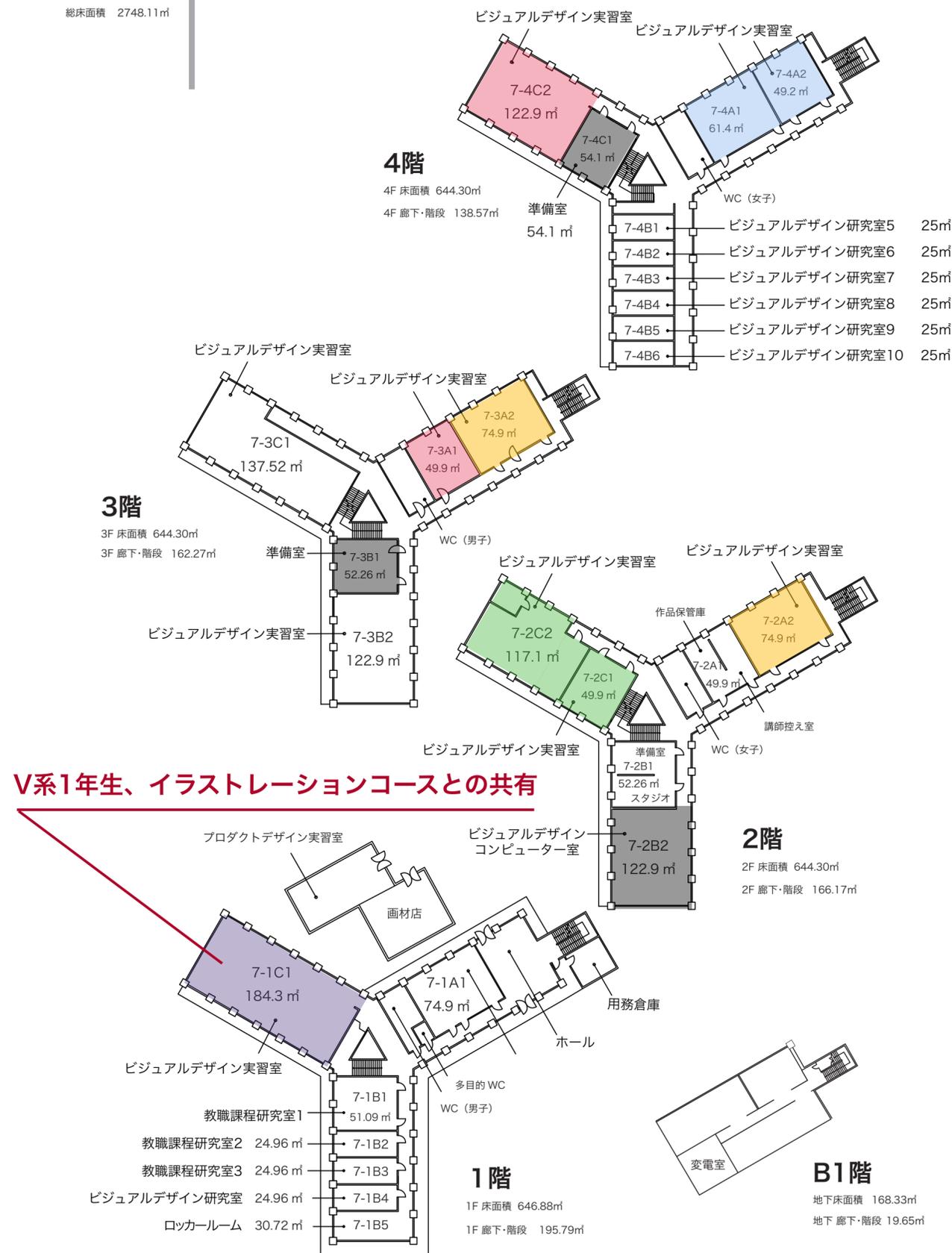
1年	7-3A2 7-2A2
2年	7-4C2 7-3A1 7-2B2(PC)
3年	7-4A1 7-4A2 7-2B2(PC)
4年	7-2C1 7-2C2 7-2B2(PC)

ビジュアルデザイン全体の学生数が超過していることに伴い、現ロッカー室（7-3B1、7-4C1）も実習室にする計画もあった。今後足りなくなった場合には7号館エントランスにロッカーの設置をせざるを得なくなる。



7号館

総床面積 2748.11㎡



1年生の課題でVCDが所掌する授業は後期「**ビジュアルデザインIVa**」である。

前述の通り7号館での人流を制限する措置として「**ビジュアルデザインIVa**」を各クラス遠隔授業とした。

これはアイデアのチェックにも重点を置く課題であることと、制作に際して特別な技術を必要としないことから昨年度同様自宅のみでの制作に支障がないと判断したためである。

これにより**7号館で1日に滞在する1年生が1クラスのみとなり2教室に分けることで密を避けることができた。**

	後期前半				後期後半			
	月	火	木	金	月	火	木	金
クラス 1	デジタル プレゼンテーションB 対面（登校） と遠隔の混合	映像表現 基礎 遠隔	ビジュアルデザインIVa 遠隔		ビジュアルデザインIVb 対面（登校）と遠隔の混合		ビジュアルデザインIVc 対面（登校）	
クラス 2	ビジュアルデザインIVc 対面（登校）		デジタル プレゼンテーションB 対面（登校） と遠隔の混合	映像表現 基礎 遠隔	ビジュアルデザインIVa 遠隔		ビジュアルデザインIVb 対面（登校）と遠隔の混合	
クラス 3	ビジュアルデザインIVb 対面（登校）と遠隔の混合		ビジュアルデザインIVc 対面（登校）		デジタル プレゼンテーションB 対面（登校） と遠隔の混合	映像表現 基礎 遠隔	ビジュアルデザインIVa 遠隔	
クラス 4	ビジュアルデザインIVa 遠隔		ビジュアルデザインIVb 対面（登校）と遠隔の混合		ビジュアルデザインIVc 対面（登校）		デジタル プレゼンテーションB 対面（登校） と遠隔の混合	映像表現 基礎 遠隔

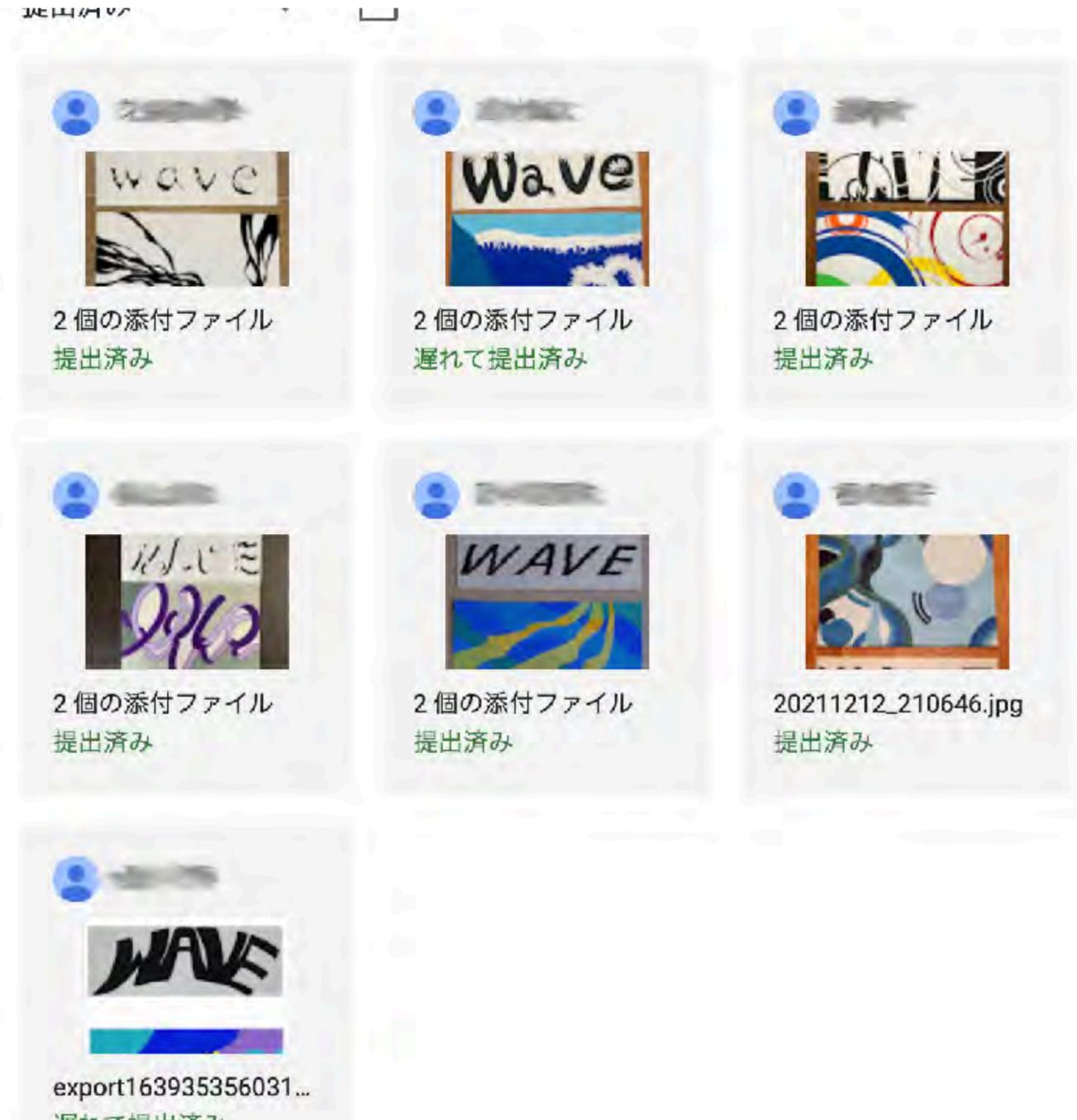
1年生は前期も後期も各クラス平等に対面授業と遠隔授業を割り振ることができた。

遠隔の場合は当然提出の遅れなどいくつか散見されるが対面時は出席率も良く、例年よりも長期欠席者が少ない印象であった。

後期遠隔の「ビジュアルデザインⅣa」は担当の非常勤教員も自宅からの指導で安全に行うことができた。

授業終了後の遅れ提出についてはコーディネーターの教員が全てチェックし、講評コメントや採点に漏れがないように留意した。

"【講評済み:12/13】"	___/100
"【講評済み:12/13】"	___/100 期限後の完了
"【講評:12/13】 講評だけお休み..."	___/100
"【講評済み:12/13】"	___/100
"【提出確認12/13】"	___/100
"【講評:12/13】 ロゴタイプの時..."	___/100 期限後の完了
"【講評済み:12/13】"	___/100
"日本独特の渦潮や、波の荒さを..."	___/100 期限後の完了
"【講評済み:12/13】"	___/100



VCDはパソコンを活用した制作だがまだ所有率の低い2年生では大学のPCルームを主に使わざるを得ない。今年度はPCルームも入室人数を制限していたことから2クラスで**PCの使用期間をずらし（表の水色部分）、密を避ける措置とした。**

PC以外の実習室も2つに分けてそれぞれ1人ずつの机に簡易的なパーテーションを立てて飛沫防止に留意した。

また、2課題目以降の課題スタート時はリサーチ期間として遠隔対応とし登校を制限し、各課題の講評会もリモートでの遠隔対応とした。

2021_2年 [VCDB I] スケジュール

	クラス1	クラス2
1,2 4/20 火	久保磯崎 対面 バリエابلレター/課題説明 アイデアスケッチ	
3,4 4/22 木	田崎恵面 対面	↓
5,6 4/23 金	関根原田 対面	↓
7,8 4/27 火	久保磯崎 対面 中間チェック 制作・ラフスケッチ提出	↓
9,10 5/6 木	田崎恵面 対面	↓
11,12 5/7 金	関根原田 対面	↓
13,14 5/11 火	久保磯崎 対面	↓
15,16 5/13 木	田崎恵面 対面 下絵チェック	↓
17,18 5/14 金	関根原田 対面	↓
19,20 5/18 火	久保磯崎 対面 完成/提出 (17:00 締切)	↓
21,22 5/20 木	田崎恵面 対面 講評	
23,24 5/21 金	関根原田 対面 ロゴタイプ/課題説明	
25,26 5/25 火	久保磯崎 遠隔 リサーチ・アイデアスケッチ	(新課題)
27,28 5/27 木	田崎恵面 遠隔	
29,30 5/28 金	関根原田 中間チェック 企画書・アイデアスケッチ提出	

	クラス1	クラス2
31,32 6/1 火	磯崎久保 アイデアスケッチ	
33,34 6/3 木	恵面田崎 対面 コンピュータ編集 PC レクチャー	リサーチ・アイデアスケッチ 遠隔
35,36 6/4 金	関根原田 対面 中間講評 A3 ロゴモノクロ提出 PC による制作	遠隔
37,38 6/8 火	磯崎久保 対面	中間チェック 企画書・アイデアスケッチ提出
39,40 6/10 木	恵面田崎 対面	アイデアスケッチ
41,42 6/11 金	関根原田 対面 (データで提出?) (17:00 厳守)	コンピュータ編集 PC レクチャー
43 6/14 月 4限のみ	リスナー 久保 対面 ピクトグラム/課題説明 テーマ選択・アイデアスケッチ	
44,45 6/15 火	磯崎久保田崎 対面 ロゴ講評 Zoom?	中間講評 A3 ロゴモノクロ提出 PC による制作

※コーディネータ：田崎先生

2021_2年 [VCDB II] スケジュール

	クラス1	クラス2
1,2 6/14 月 4限のみ	リスナー 久保 対面 ピクトグラム/課題説明 テーマ選択・アイデアスケッチ	
3,4 6/17 木	あべ原田 対面 ピクトグラム アイデアスケッチ	
5,6 6/18 金	大塚磯崎 対面	
7,8 6/21 月	関根あべ 対面	(データで提出?) (17:00 厳守)
9,10 6/22 火	磯崎久保田崎 対面	ロゴ講評 Zoom?
11,12 6/24 木	あべ原田 対面 原案書・サムネイル チェック	ピクトグラム アイデアスケッチ
13,14 6/25 金	大塚磯崎 対面 グリッド上での 下絵制作	
15,16 6/28 月	関根あべ 対面	
17,18 6/29 火	磯崎久保 対面	
19,20 7/1 木	あべ原田 対面	原案書・サムネイル チェック
21,22 7/2 金	大塚磯崎 対面 PC による制作	グリッド上での 下絵制作
23,24 7/5 月	関根あべ 対面	
25,26 7/6 火	磯崎久保 対面	
27,28 7/8 木	あべ原田 対面 (データで提出) (17:00 厳守)	
29,30 7/9 金	大塚磯崎久保 対面 ピクト講評 Zoom?	PC による制作
31,32 7/12 月	関根あべ久保 対面 キャラクターデザイン/課題説明 Zoom?	

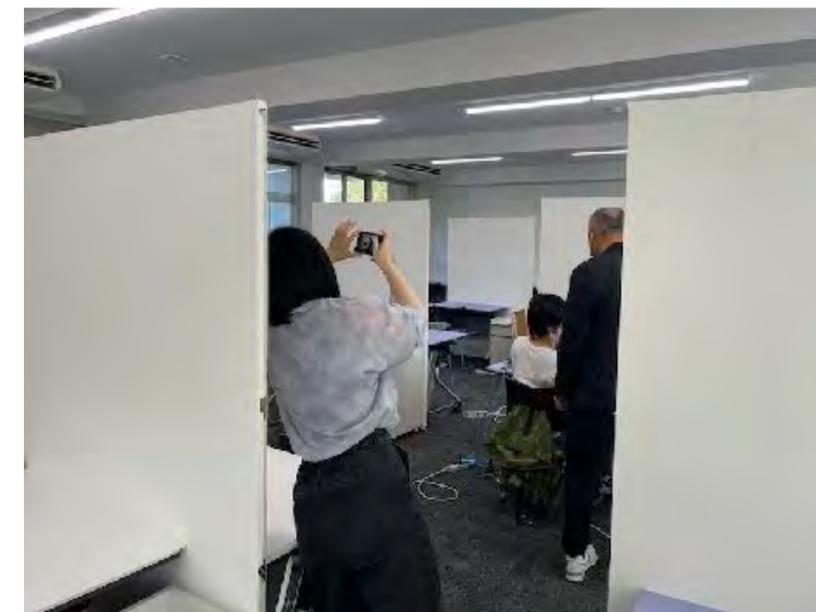
※コーディネータ：久保先生

	クラス1	クラス2
23,24 7/13 火	磯崎久保 対面 キャラクターデザイン アイデアスケッチ	
25,26 7/15 木	あべ原田 対面	
27,28 7/16 金	磯崎田崎 対面 中間チェック	(データで提出) (17:00 厳守)
29,30 7/19 月	関根あべ久保 対面 下図作成	ピクト講評 Zoom?
31,32 7/20 火	磯崎久保 対面	キャラクターデザイン アイデアスケッチ
33,34 7/22 木	あべ原田 対面	
35,36 7/23 金	磯崎田崎 対面 PC による制作	中間チェック
37,38 7/26 月	関根あべ 対面	
39,40 7/27 火	磯崎久保 対面	
41,42 7/29 木	あべ原田 対面 (データで提出) (17:00 厳守)	
43,44 7/30 金	磯崎田崎 対面 キャラクター講評 Zoom?	PC による制作
45,46 8/2 月	関根あべ久保 対面 (新課題)	
47,48 8/3 火	磯崎久保 対面	
49,50 8/5 木	あべ原田 対面 (データで提出) (17:00 厳守)	
51,52 8/6 金	磯崎田崎久保 対面 キャラクター講評 Zoom?	

7号館各実習室では机ごとに簡易的なパーテーションを備え付け飛沫防止に留意した。

2年生は7-4C2と7-3A1に別れざるを得なかったが教室のキャパに大きな差がある。アイデアチェックの際は学生の行列ができてしまわないように配慮した。

PCルームでも使用できる台数を半減させて間隔を開けさせた。使用後は各自使用したPC周りや手の触れた箇所の除菌、清掃を徹底させた。

**7-4C2****7-3C2****7-4A1****7-2B2**

2年生は昨年度ほぼ1年を通して遠隔授業であったために今年度の対面授業を心待ちにしていた。比較的出席率も良好な学生が多かった。さまざまな事情で遠隔での受講を続けざるを得なかった学生もわずかにいたが昨年度の遠隔授業のノウハウを活かして課題説明、講評を対面と遠隔と分け隔てなく行うことができた。

やはり対面でのメリットをこれまで以上に感じた1年間であったが今後全員が登校となった場合さらに7号館の物理的なキャパの問題が大きくなってゆく。1学年のなかでクラスを分けて課題進行をずらしてゆくことも指導上の煩雑さが常に伴ってゆくのので安心安全を第一に全学的な施設設備を中長期的に検証しなければならないと感じた。



2021年度後期 授業改善研修会

映像メディアデザイン・写真専攻

授業事例の報告

映像メディアデザイン・写真専攻では、2020年度に引き続き2年・3年・4年各学年の全員の通信環境と遠隔受講希望者の確認を取り、連絡網「Slack」、課題資料「Googleclassroom」、遠隔受講者「zoom」、題提出「Googleclassroom」で運用を行った。2年・4年に在籍する聴覚障害の学生にはzoomのチャット機能やSlackが大いに役に立ち、更にメンタルを崩した学生などもSlackやzoomにて出席確認を行なった。

【全体連絡 Slack】

・LINEはプライベートで使っている学生が多く、Slackの導入によって棲み分けを図った。2・3年生の後期「ゼミ」や「就職支援」4年生の個別指導に「DM」と使い分けることができ有効であった。Googleclassroomの「限定公 コメント」は昨年同様評判が悪かった。（わざわざGCにログインする手間があり、sns世代は即時性のあるSlackが有効であった）

優れた点：スマホに通知が入る。2GBまでデータを添付できる。DMの反応が早い。中国ではGCの接続がVPNでないとできないが、Slackは使える。

Gmailは色々なところから大量に送られて重要度が分からず、埋もれてしまうがSlackはそれがない。

問題点：大学からお知らせが入るGmailは数が多く、自分にとっての優先順位を確認するのが面倒である。そのためメールは殆ど見ない学生が増えている。就職情報やポータル情報（休校やアンケートなど）は、ほとんど見ないという意見が多い。しかしSNSは遅い時間や土日に送ってくる学生もいる。現在は対応している。

映像メディア・写真専攻以外の他の講座との足並みが揃っていないのは問題点だと感じている。

【課題資料 Googleclassroom】

・G-Suiteの「ドキュメント」「スプレッドシート」「スライド」「forms」の使い分けが効果的であった。

・学習ポートフォリオの作成を、Google スライドかGoogle siteでできるといいと感じている。

【課題提出 Googleclassroom】

・メンバーリストが学籍番号でない点が、ポータルとの互換性がなく非常に不便である。

・Googleclassroomの限定公開は使用していない。

アクセス-ログインが面倒である。限定公開コメント欄は数行の入力が非常に扱いにくい。

・GCは、同級生の提出作品を見られない。切磋琢磨できない状況である。

・非常勤講師の先生方は、大学付与のGmailを使っただけでない。

【課題例】

Online Open-air Sculpture Project (非常勤講師：本間先生)

3年生の後期前半「映像メディアデザイン表現III」の課題

※担当の4人の先生のそれぞれの専門分野にゼミ分けをし、それぞれの課題を遂行する。

本間ゼミでは遠隔授業で授業を行うこととし、ゼミ生が受講する場所をサイトスペシフィックとして捉え、それぞれが選定した場所で環境芸術（アースアート,ランドアート）を行い、オンライン上で展覧会を開催した。（ → <http://online-openair-sculpture-project2021.com> ）



About

オンライン・オープンエア・スカルプチャー・プロジェクト
Online Open-air Sculpture Project

昨年に引き続き、横浜美術大学映像メディアデザイン学科3年生による野外彫刻展「オンライン・オープンエア・スカルプチャー・プロジェクト 2021」を開催する。

「オンライン・オープンエア・スカルプチャー・プロジェクト」は、文字通りオンライン上の野外彫刻展である。作品が設置されるのは都県をまたいだ国内各地に住む作者（ゼミ生）の自宅周辺であり、作品同士は遠く離れている。

会場は児童公園、河原、空き地など日本中の何処の街にもあるような匿名的な風景である。オンライン授業が続き、学校で顔を合わせるができない学生たちの日常と繋がるこれらの風景は、私たち観者の街にも在る同じような風景と地続きにも思える。

オンライン上で繋がるのは、作品だけでなくそのような匿名的な風景でもある。

2020年度、横浜美術大学では新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、すべての授業がリモートでの体制で実施され、学生同士や教員が互いの顔を見てコミュニケーションできない状況が続いた。

制作した作品を展示、鑑賞し合うという従来の形態を再考せざるを得ない中「どのように実践的な表現の演習ができるか」を模索しつつゼミを実施した。

結果、本プロジェクトはこのような展覧会形式となった。ゼミ生たちは自宅周辺をリサーチし、選んだ場所で何ができるかを考え、それぞれの表現を試みた成果を2020年11月9日から15日間の「オンライン・オープンエア・スカルプチャー・プロジェクト 2020」として発表した。

2021年11月現在、神奈川県は新型コロナウイルスまん延防止措置は漸次撤廃されている。日本全体のワクチン接種率が70%以上に達して新規感染数も減少し、大学の授業は徐々に通常体制に戻りつつあるように見える。

しかし、未だ新型コロナウイルス感染拡大の脅威が無くなった訳ではない。

それぞれの日常風景と、そこに設置した作品をオンラインで繋げ発表するこの試みは、学生たちの作品制作の実践と発表の方法として今後も有効かもしれないと考え、引き続き継続することになった。

ゼミ生たちは情報収集、デザイン作業、広報など、展覧会に関わる作業を分担して行った。手探りではあるが、この共同作業からも他者とコミュニケーションし、繋がる方法を発見できればと願っている。



現在大学では、感染対策を講じながらオンライン授業と対面授業を併用していますが、世間一般でも展覧会の形式にオンラインを取り入れるケースが増えています。

このゼミでは、昨年度から「OOSP (Online Openair Sculpture Project)」というプロジェクトを発足させており、各自の自宅から近い野外でインスタレーション作品を制作し、その記録をオンライン展覧会として発表する取り組みです。

～ 大学ブログより



・その他

写真専攻は今年創設3年目で11名の学生が在籍し、専門の助手副手もない為ほぼ教員1名で運用することとなっている。

今年は写真専攻の研究生が2名おり、4年生の授業や実習への参加をお願いした。2名の研究生は、大型出力や額装、マウントの手伝い、制作アドバイスや展示のアドバイスなどファシリテーターとして大活躍した。対価は無いものの研究室としては学外での個展の支援を行い、2名とも初個展を成功させた。こういった実績は、大学院入試や今後の活動に大きな自信となり実績作りにも一役買った。

報告者

映像メディアデザインコース・写真専攻 三橋 純

〈2021年度後期教員の教育力向上のための授業改善研修会〉

イラストレーションコース

～はじめに～

イラストレーションコースでは、昨年のコロナ禍における授業運営の経験を活かし、本年度の授業実施方針を踏まえ、対面授業を主とした遠隔授業とのハイブリッド型の授業を行なってきた。また、本コースは人数が多く、課題やレクチャー、講評など、クラスを分けタイムラグを設けないと運営できない状況であったため、対面授業は3つにクラスを分け運営にあたった。

本報告は、昨年の遠隔授業の対応を基に改善した、本年度の本コースの授業運営の主な事例である。

主な対応事例

1. クラス編成について
2. ハイブリッド型授業の運営について
3. 昨年度FD活用事例

1. クラス編成について

7号館

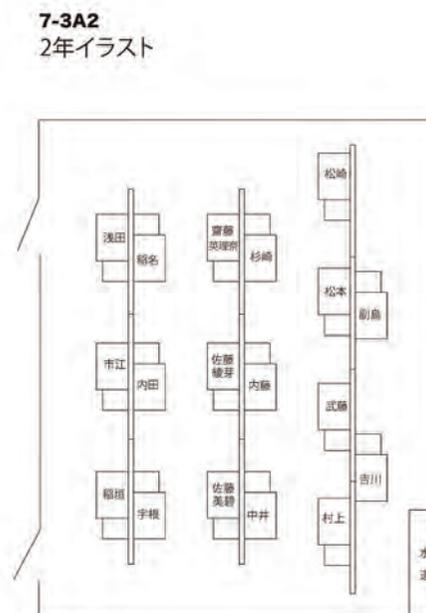
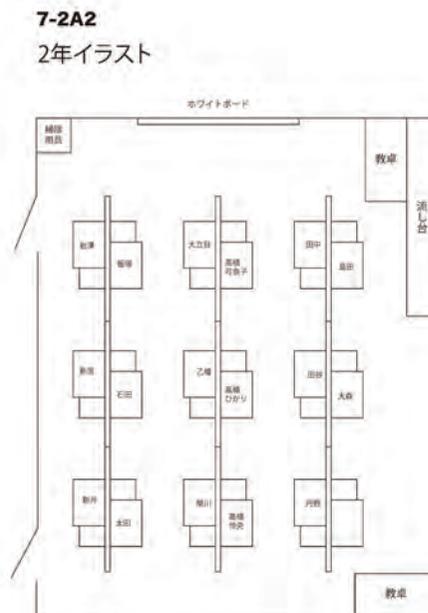
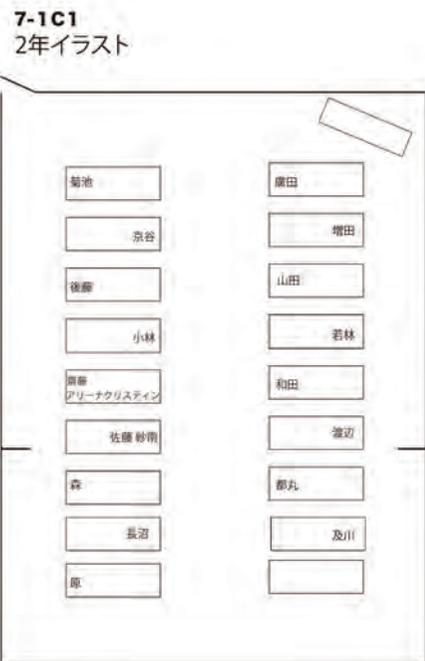
教室割り振り図

(前期・後半～後期・後半)

各教室は密を避け、
各座席にスペースを設けた。

PCでの制作を必要とする課題では、
PCルームに全員が収まらず、
全員が同日にPC作業をすることができない。

PCルームでのレクチャーは
3日間に分けて行った。



対面授業

各学年、7号館、PCルーム、学生ホールで制作する際に密を避けるため、入室可能人数を設定し、3クラス編成にした。7号館教室は3つの部屋に、1号館PCルームは、3つのクラスを曜日ごとに分け、使用できる日を設定した。振り分けられた曜日に使用することを基本としていたが、各学生の制作の進捗により、使用可能日を調整し、フレキシブルに対応した。

遠隔授業

遠隔授業は周りに同学年の学生がいなく、一人での制作になるため、孤立させないように、都度、Google Classroomでの呼びかけをし、対応にあたった。また、レクチャー、講評など全員対象の授業ではZoomで中継し、同等の内容を配信した。

今後の課題点

対面授業は学生所持のPCの持参を可としたが、wi-fiを使える環境が一律でないため推奨は難しいこと、またコロナ禍が収束した後、PC教室を全席使用可にしても、在籍人数よりPC台数が足りないことが挙げられる。遠隔授業は制作者の進行状況が把握づらく、声かけのタイミング、頻度が難しいことが挙げられる。学生の状況の置かれてる想像を想像し、丁寧な対応を継続することを心掛けていきたい。

2. ハイブリッド型授業の運営について



1. アイコン

対面、遠隔のハイブリッド型授業では、並行する課題文やレクチャー、講評など、双方の学生に迷いなく情報を正しく届けることが必須である。

また、人数が多い本コース* では学生は元より、助手副手、教員もその情報を共有し、共通認識をもち混乱を避けることが何より大切である。

本年度、ハイブリッド型授業を運営するにあたり、それぞれが正確且つ迅速に情報を受け取れるように、対面と遠隔のアイコンを用意し、「いま何を見ているのか」ということを一目で分かるようにすることを心掛けた。遠隔から対面の切り替え、その反対のケースでも、学生が迷わないようにという狙いもある。些細なことではあるが、混乱なく円滑に授業を実施できた。

* 学生数：150名以上(2～4年+研究生)
教員数：28名(教員、講師、助手、副手)

対面

イラストレーション基礎1 / 課題②

静物デッサン

2021
《前期・前半》
2年

月・火・金 / 3限(13:40～15:10) 4限(15:20～16:50)

学習目的 「観察する力」を養う。
構図、形、陰影、質感、遠感、全体感などデッサンをするを通じ、総合的な対象の捉え方を学び、「観察する力」を養う。

テーマ 静物モチーフをデッサンする。

表現形式 ・支持体…… 画用紙 (A2サイズ) 木製パネル水張り。縦横自由。
・使用画材…… 鉛筆デッサン用具一式。

提出 画用紙 (提出する際にはフィキサチーフをかけること。)

備考 ・本書の画用紙に描く前、構図を確認するため、クロッキー帳でクロッキーすること。
・座った位置以外にも様々な場所からモチーフを観察してみましょう。
・提出する前に各自作品を撮影し、ポートフォリオにアップすること。

スケジュール

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
→ 導入・静物デッサン			静物デッサン				→ 導入・静物デッサン			静物デッサン	静物デッサン				静物デッサン

23	24	25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
→ 静物デッサン・講評		→ 導入・遠景デッサン			遠景デッサン / 中間チェック				遠景デッサン	遠景デッサン			遠景デッサン		遠景デッサン

※ 社会情勢によって、変更の可能性もあります。

課題文 / 対面

遠隔

イラストレーション基礎1 / 課題②

静物デッサン

2021
《前期・前半》
2年

月・火・金 / 3限(13:40～15:10) 4限(15:20～16:50)

学習目的 「観察する力」を養う。
構図、形、陰影、質感、遠感、全体感などデッサンをするを通じ、総合的な対象の捉え方を学び、「観察する力」を養う。

テーマ 静物モチーフをデッサンする。
・各自、形状の異なる2種類のモチーフを用意すること。
・形状の異なるモチーフ2種類 (一つは有機物、もう一つは無機物のもの)
・モチーフが置かれる台には白い布を敷くこと。ない場合は白い紙などを敷くこと。
・対面授業のモチーフは、植物(ストレリチア(鉢植え))、相貫体(石膏モチーフ)。

表現形式 ・支持体…… 画用紙 (A2サイズ) 木製パネル水張り。縦横自由。
・使用画材…… 鉛筆デッサン用具一式。

提出 画用紙 (撮影し、Google Classroomで提出。)

備考 ・本書の画用紙に描く前、構図を確認するため、クロッキー帳でクロッキーすること。
・座った位置から意外にも様々な場所からもモチーフを観察してみましょう。
・途中経過を必ずアップロードし、コメントをもらうこと。
・Google Classroom、ポートフォリオに両方にアップすること。

スケジュール

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
→ 導入・静物デッサン			静物デッサン				→ 導入・静物デッサン			静物デッサン	静物デッサン				静物デッサン

23	24	25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
→ 静物デッサン・講評		→ 導入・遠景デッサン			遠景デッサン / 中間チェック				遠景デッサン	遠景デッサン			遠景デッサン		遠景デッサン

※ 社会情勢によって、変更の可能性もあります。

課題文 / 遠隔

文字のみ

対面

遠隔

文字+アイコン

対面



遠隔



2. ハイブリッド型授業の運営について

対面

イラストレーション基礎Ⅰ / 課題②

静物デッサン / 1日目

2021.5.7. 金

13:40 ~ 15:10 / 3限 (13:40~15:10) 4限 (15:20~16:50)

2021

〈前期・前半〉

2年

13:40 1. 出席確認 (7-1C1)

・読み上げ / (山下)

13:50 2. 導入 (7-1C1)

・課題説明 (大切なところをメモする)

・レクチャー (山下)

・諸注意 etc...

14:00 3. 部屋移動 / 制作準備

→ 7-1C1、7-2A2、7-3A2 に移動

14:10 4. 制作 (7-1C1、7-2A2、7-3A2)

・静物デッサン

15:10 〈3限終了 (休憩 / 10分)〉

15:20 5. 制作 (7-1A1、7-2A2、7-3A2)

16:40 6. 授業の終わりに (7-1A1、7-2A2、7-3A2)

・身上書を受け取る。

・10日 (月) の説明。

16:50 7. 終了

▼ スケジュール

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
導入・静物デッサン		静物デッサン	静物デッサン				導入・静物デッサン			静物デッサン	静物デッサン				静物デッサン

23	24	25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
静物デッサン・講評		導入・風景デッサン			風景デッサン / 中絶子エッセイ			風景デッサン / 中絶子エッセイ				風景デッサン			風景デッサン

※ 社会情勢によって、変更の可能性もあります。

進行表 / 対面

遠隔

イラストレーション基礎Ⅰ / 課題②

静物デッサン / 1日目

2021.5.7. 金

13:40 ~ 15:10 / 3限 (13:40~15:10) 4限 (15:20~16:50)

2021

〈前期・前半〉

2年

13:40 1. 出席確認

・ Google Classroom

13:50 2. 導入 (Zoom で視聴)

14:00 3. 制作スタート (自宅)

・ 静物デッサン

15:10 3限終了 (休憩 / 10分)

15:20 4. 制作 (自宅)

・ 静物デッサン

16:40 5. 授業の終わりに

・ 10日 (月) の説明

16:50 6. 終了

▼ スケジュール

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
導入・静物デッサン		静物デッサン	静物デッサン				導入・静物デッサン			静物デッサン	静物デッサン				静物デッサン

23	24	25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
静物デッサン・講評		導入・風景デッサン			風景デッサン / 中絶子エッセイ			風景デッサン / 中絶子エッセイ				風景デッサン			風景デッサン

※ 社会情勢によって、変更の可能性もあります。

進行表 / 遠隔

II. 進行表

本年度、前期・前半、2年生では新たなカリキュラムを設けた。

新たな授業であり、ハイブリッド型且つオムニバス形式の授業のため、講師の先生方、助手副手含め、関わる人全てが授業の進行を把握しておくことが必要であった。

シミュレーションを繰り返し、対面、遠隔それぞれの1日の大まかな流れの進行表を用意し、双方を対照できるような見え方にした。授業前、進行表を見ながら教員間で割り振り等の打ち合わせを行い、対面、遠隔ともに円滑に進行できることを目指した。

2. ハイブリッド型授業の運営について

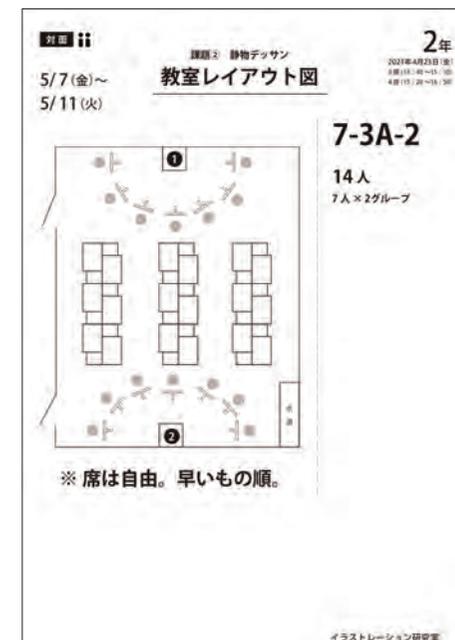
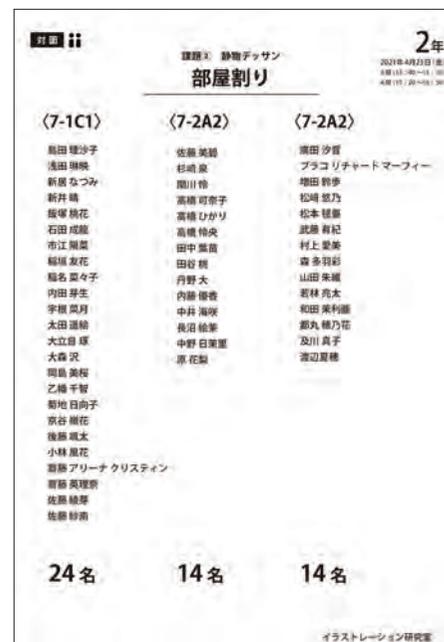


7-1C-1

密を避け広いスペースを確保できている。

III. 3クラス制

対面授業は密を避けることに留意し、3クラス編成にした。モデル、モチーフを囲んで制作するクロッキー、静物デッサン、静物着彩の課題の際は十分にスペースを確保し、モチーフやイーゼル、椅子などのレイアウト、片付けなど、学生がストレスなく制作できるようシミュレーションを重ねた。



2. ハイブリッド型授業の運営について

IV. 遠隔授業

・モチーフ (前期・前半)

モデルを必要とする人物クロッキーの課題では、ご家族の方など身近な人をモデルとしてもらい、静物デッサン、静物着彩の課題では、対面授業のモチーフを参考に類似するモチーフを用意してもらった。また、風景着彩では安全と感染症対策をすることを十分に伝えた上で各自、自宅の近所をモチーフに選んでもらい、各課題で対面授業と同等の学びが得られることを目指した。

・PC制作 (後期・後半～)

パソコンを必要とする課題において、制作できる環境がない学生には、前年度に作成した遠隔授業用のアナログ制作の資料が財産になり、運営に役立った。

・講評 (Zoom)

対面授業と同等のモチーフを用意してもらうことにより、講評時に自分ごととして聞いてもらうことを狙った。

対面



学生作品／対面

遠隔



学生作品／遠隔

～まとめ～

本年度の取り組みから得た経験を活かし、次年度以降も様々な状況に対応すべく、さらにブラッシュアップし、教員、助手副手と協力しあい、より良い授業の運営をしていく。

2021年度 修復保存コース 授業改善研修会資料

修復保存研究室 鳥越義弘

- 本年度、修復保存コース・専攻では全ての専門科目において対面授業を行った。
- 本年度より、2年次専門科目が開講となり、他のコースと同様に3年間のカリキュラムとなった。
- 本コースを選択した2年次生とコース変更による3年次生を同時に受け入れた年度であり、対応に追われた。

2年次 修復保存基礎 I～IV

- 今年度新規開講。
- 美術作品についての基礎知識を学び、美術品への理解を目的とする。
- 修復を学ぶ学生、制作者に向けた入門実習として、各分野の作品の材料、基底材などの基礎知識と制作プロセス及び技術について学ぶ。

新規開講授業ではあるものの、前期の古典絵画技法演習は、これまで3年次に実施していた内容を移行したため、特に大きな混乱はなかった。

後期では、完全新規授業の描画材・支持体サンプル制作、サンプル耐性実験を実施した。全体の進行遅れや想定外の実験結果の発生など、改善すべき点が多々あった。



描画材・支持体サンプル実験



古典絵画制作



支持体制作



描画材作成

3年次 修復保存Ⅰ～Ⅳ

- 2年間カリキュラムの最後の学年。
- 修復分野に関心を持つ学生に向けた入門実習として、各分野の材料、基底材などの基礎知識と道具、技術について学ぶ。
- 技法材料への深い理解を通じて作家としての作品制作に資する知見・技術を習得する。



油彩画の修復(付着物除去)



油彩画の調査(紫外線調査)

絵画作品（油彩）、紙作品（版画、書籍、文書）、立体作品（仏像）の修復演習を実施した。

今年度は、修復作品に偏りが出ないように、各分野で多くの種類の作品の修復を行った。

修復専門道具（コテアイロン、ビストリ、刷毛など）を学生数分購入したことで、効率的で円滑な実習を行うことができた。



仏像修復(剥落防止)



版画の修復
(クリーニング)



文書の修復
(接着物除去)

4年次 卒業制作 美術研究Ⅰ、Ⅱ

- 卒業制作として作品修復や、修復保存に関する研究として論文・ポスターと作品（復元作品等）を制作する。
- 各自のテーマに基づく明確なコンセプトや研究課題を設定しつつ、自己表現や独自研究成果の確立を目指して研究・制作する。



浮世絵の修復(水洗)



油彩画の修復(補彩)

本年度の卒業制作(研究)では、半数以上（3名）が作品修復（油彩画、浮世絵、仏像）を研究テーマとした。

卒業制作とともに執筆した論文では、各分野の実技指導の講師の論文指導とともに、専任教員による、ゼミ形式の論文指導を実施した。



古典技法研究(箔接着実験)



仏像修復(補作)



油彩画の模写

その他の取り組み

- ソーシャルディスタンスを確保するため、共同作業を極力減らし、個人で行うことができる作業を中心に実習を行った。また、学生1人につき1机を割り当て、制作道具、実験機材においてもできる限り全員分取り揃えた。
- マイクロスコープ、ホットテーブルなどの機器を導入したことで、授業の質が高まった。
- 学生への連絡、課題の提出、授業資料配布などはGoogle Classroomを利用し、効率化を図った。



2年次の授業の様子



マイクロスコープを活用したクリーニング



ホットテーブルを用いた修復作業

今後の課題

- 修復実習では損傷した作品を教材として用いているが、作品の確保に課題がある。価格の面や著作権の問題から、購入可能な作品は限られており、授業内容に適した損傷が生じている作品をタイミングよく購入できる可能性は低い。
- 修復作業では、アルコール（エタノール）や揮発性油（テレピン、ミネラルスピリット）などの溶剤を扱う。防毒マスク、有毒ガス対応の空気清浄機を準備し、万全の対策を行っているが、溶剤の扱いに関する講習が十分ではない。今後、安全講習の時間を十分に確保する。
- 卒業制作において作品を修復する場合、卒業制作期間内に修復を完了することが難しく、作品の修復は数年に及ぶ。そのため、卒業制作後、修復内容の引き継ぎを行う必要がある（修復報告書を作成する）。

2021年度 教員の教育力向上のための授業改善研修会 資料

共通科目研究室

2022年1月30日

内田 均

【はじめに】

本年度、共通科目研究室所掌科目においては、一部の実習科目を除きほぼ全ての科目で遠隔授業を実施した。したがって、この資料では遠隔授業の方法（授業運営、資料作成、課題実施など）に関することをまとめている。2ページ以降は、5名の専任教員が各担当科目について記載したものである。

【概要】

共通科目全体における遠隔授業の実施方針はおよそ以下の通りとなっている。

- ・ 定期試験期間がないため、各種課題（小テスト、レポート、レスポンスシート等）を元に成績評価をする。
 - ・ 実技科目の対面授業実施に伴う調整措置としてオンデマンド方式を原則とする。
 - ・ 出欠席の扱いについては、以下の目安を設けた。
- ①欠席と判断するまでに1週間程度をみる。
 - ②授業曜限から2日経過以降に課題の締切を設ける。

なお、学生に対しては、共通科目履修に当たり以下の点を文書で伝達した。

- ・ 受講時間：授業開始時刻以降、夜や翌日頃まで受講可。
- ・ 出欠席：Google Classroomでの課題等の提出で判断される。課題等の期限／締切や遅刻の扱いなどの細かいルールは授業によって異なるため、授業内での説明に従うこと。
- ・ 受講場所：感染防止対策のため、対面授業が終わったら速やかに帰宅し、自宅で共通科目を受講すること。

共通科目の性質上、これ以上実施方法を標準化することは難しく、この資料においても研究室として体裁を統一することはあえてしなかった。2020年度の経験を踏まえて各授業においてなされた様々な創意工夫や課題等をご覧頂ければ幸いである。

オンデマンド授業における出席確認と理解度確認のための課題（西洋工芸史の例）

① 選択式設問

用語の選択や、記述について正誤の判断
または作品画像を見て時代や様式を識別

② 記述式設問

100～150字程度で考えを記述

③ 検索課題

データベースから条件に合った作品を見つけて
概略図と作品情報を報告

- ・ 各回いずれかの形式で出題
- ・ 平常点として成績評価する
- ・ 選択式設問は得点、記述式と検索課題は取り組み方（主体的に考えているか、気をつけて選んでいるか等）によって評価する

出題の意図／想定される効果

- ・ いくつかの形式を組み合わせることで、文章の苦手な学生が全て不利になることを避ける
- ・ ①の画像問題は、授業資料に挙げた作例とは別のものを出題して、特徴を理解できたか見る
- ・ ③の課題を通して、海外の美術館のコレクション検索を活用することを覚えさせる
- ・ 対面授業の時よりも、学生は主体的に取り組まなければならない
- ・ 工芸史は各回で扱う素材やジャンルが異なるため、最後にレポートを1枚書かせるよりも1回ごとに学びを確認する方が適している

遠隔（オンデマンド）授業における工夫

- ・ 学生がオンデマンド授業の受講を円滑に行えるよう、課題提出期間を約1週間確保。
- ・ 学生の通信環境に配慮し、授業資料を映像（YouTube限定公開）、PDF+音声データの2種類準備。
- ・ 毎回小課題を課すことで、学生自身が学修内容の振り返りや学修成果の確認を行えるようにした。
- ・ 知識の修得にとどまらず、知識を基にして自身で発見し、考える習慣をつけるよう、課題内容と設定を工夫。
- ・ 課題は、授業内容をまとめる質問-回答形式、小テスト、スケッチ、アンケートなど、バリエーションをもたせることで、学生の課題への取り組みにおけるマンネリ化を防いだ。
- ・ 教員が課題の提出確認を行ったことを、Google Classroom限定公開コメントを通じて学生個人宛に欠かさず返信。
- ・ フィードバックは個人宛に行うとともに、全体に対しても行った。その際、他学生の提出課題が学生同士で閲覧できるよう資料を作成。

遠隔（オンデマンド）授業の問題点・課題

オンデマンドはテストが出来ないため、知識教授型の授業の場合、学修の度合いを正確に把握することが難しい。この問題を解決するためには、知識の有無を評価するのではなく、学生個人の独自の考えについて評価していかなければならない。学生に「考えさせる」ための様々な導きに加え、当然ながら一定程度のディスカッションが必要となるが、これらを実現するにはオンデマンド方式では限界がある。リアルタイムの時間設定がなされていないオンデマンド方式では、学生同士のディスカッションができず、結局教員が各学生一人ひとりと毎回向き合い、相互のやりとりをGoogle Classroomで展開しなくてはならず、教員・学生ともに負担が大きい。

遠隔方式であっても、せめてリアルタイムで実施することができたなら、対面（登校）と同様、あるいはそれに近い学修効果が見込めよう。

* 授業ポートフォリオ

概要：

コロナ禍の2020年から現在までの開講科目において、対面方式にかわるオンデマンド形式授業の実施が求められている。そこで、単体の授業動画配信ないしスライドプレゼンテーション/pdf資料の配布といった方式ではなく、授業ごとに作成したウェブサイトを軸に制作課題やディスカッションを課し、学生の制作思考を発展・深化させる環境を提供した。

ウェブサイトによる授業コンテンツの配信：

LMSを活用したオンデマンド授業では、教員にとっての情報管理が効率化する反面、学生に対して過剰に情報配信しがちであり、それが学生にとって大きな負担となっている。とりわけオンデマンド方式による授業では、動画、pdfやスライドプレゼンテーション、課題など大量の教材が配信されるが、資料がそれぞれ独立すればするほど、事後学習に伴う資料の閲読率は下がると思われる。

そこで、各資料の視聴・閲覧、課題をスムーズに連動させ、学生各自のペースで学習できる方法を再検討し、ウェブサイトによる授業コンテンツ配信を採用した。

これまでの対面授業時には資料配布を行い教員のスライドプレゼンテーションを中心に行っていた。そのため、学生はスライドと講義ノート、資料を煩雑に行き来しながら学習していた。通常の資料配布方式はほぼそれと同じ学習環境になると思われる。しかしウェブサイトの場合、授業回ごとに独立した一つのページに画像、動画、関連サイトへのリンク、文献情報などを授業の流れに沿ってシームレスに掲載することができ、ひとつの「物語」として構成することが可能である。資料が散在せず、かつページごとにコンテンツが自立していることで、学生には淀みなく各回の授業を受講できるほか、全授業を体系的に把握でき反復的に見返すハードルを下げる効果があるため、事後学習を効果的に行うことが期待できる。

加えてウェブサイトにおける「視覚情報」中心の授業設計は、情報保障の面において聴覚障害をもつ者とそうでない者との間の差異が少ないことも特筆できる。

授業方法—制作課題、ディスカッション：

次に、授業内容について説明する。左記のウェブサイト方式の授業では、加えて①「講義-関連する制作課題の実施-講評」のサイクル、ないし②チャットを活用したディスカッションを実施した。

①については、対象ないしコンセプトについて理論的な概略を説明しつつ、制作課題による追体験ないし追創造を通じた考察を課している。講評の段階では、提出された全ての課題作品を公開し、それらの技巧的優劣を評価するのではなく、いわゆる「車輪の再発明」の多様なバリエーションとして捉え、その思考プロセスについて学生と「共に」考える、というスタンスで行っている。

②については、Classroomのクラスコメント欄や、授業用に立ち上げたSlackを利用し、授業テーマにそった問いについてグループディスカッションを実施したのちに、ZOOMなど会議ツールを用いたオンラインでの対話を実施した。チャット方式の対話は、学生にとって思考の猶予が与えられるためメリットは大きい。さらにタイムラインで議論の全容や方向性をあらかじめ共有することができるため、時間的制約のあるオンラインディスカッションを効果的に行うことができる。

なお講評と別に、提出課題については限定公開コメント欄にて個別にフィードバックを行っている。普段なかなか個別のコミュニケーションを行うことが少ない講義系の授業において、学生のキャラクターや独自の思考が見える機会となった。

授業実施方法の概要と具体例（「基礎英語」「文学」「身体表象論」）

【課題】

（1）出題

- ・毎回の通常課題（採点用、出席確認用）、および中間・期末課題（採点用、復習問題またはレポート形式）を課した。
- ・提出用には主にGoogleフォームを使用し、画像入りのレポートに関してはGoogleドキュメント等での作成を指定した。
- ・基礎英語では実施過程での難易度調整や採点対象外の追加問題を実施した。

（2）フィードバック

- ・誤りや不体裁の解答に焦点を当て、そこから学べるような解説を提示した。
- ・基礎英語では誤答の選択肢に関する削除・修正を明示した上で解説した。
- ・文学と身体表象論では毎回の小レポートに対する添削と講評を次回の授業ファイルに記載した。
- ・中間／期末課題で全員に、また実施方法や内容に特に問題がみられた学生に対し、フォームのコメントや限定公開コメントで個別に指導した。

【スケジュール関連】

（1）期限設定

- ・掲示日4日で期限→3日後（次回授業直前）最終締切という2段階の期限／締切を設けた。
- ・課題遅れに対して学生が意識付け出来るような措置をおこなった。すなわち、最初の期限についてはGoogle Classroomの「課題」内における「期限後の提出」の表示、最終締切についてはGoogleフォームの回答受付終了操作による終了表示、これら2段階を学生に明示的に伝えるようにした。

（2）課題の実施時期

- ・通常課題は授業ごとに、また中間や期末の課題は従来の対面授業とは異なる時期に設定し、体裁の工夫による負担軽減を図った。たとえば基礎英語の通年最終課題（期末試験相当）を前倒しで冬休み中の任意の時間で取り組めるようにした。

コロナ禍における遠隔授業について

- ・「現代美術論」、「工芸論」、「造形文化論」に関しては、極力 対面授業次と差がないよう配慮し、講義資料の配布とともに、YouTube を使った授業解説を行なって進行しています。
- ・YouTube を使った授業解説（1時間前後）は、2020年度後期に収録したものをベースにネット上に限定公開しています。
- ・当日収録した10分前後のイントロダクションを加えています。
- ・評価は、授業内容に即し毎回出題される課題、ショートレポート若くはエスキース（スケッチ）などの内容により各回3段階で評価し、15回分を集計した合計で成績評価とし、同時にこれを持って出席とします。

授業改善研修会用資料

教職課程研究室 長尾 幸治

授業改善研修会用資料

■ 所属研究室：

教職課程研究室

■ 教員名：

長尾 幸治

■ 担当授業：

美術教育論 美術科教育法Ⅰ・Ⅱ 教職実践演習(中・高)(オムニバス) アカデミックリテラシー

■ 授業実施ツール：

一部遠隔

はじめに

- 本資料は自身の担当授業の中でも「美術教育論」(前期、後期各1コマ)の授業運営における授業方法の工夫や課題点、改善点についてまとめたものである。
- 担当授業は主に講義形式で行っており、授業概要については以下のようになっている。(シラバスより抜粋)
- 授業概要 (美術教育論)

「美術科教育における基本的な知識の習得をめざす。」

美術教育の歴史を概観するとともに、現代の美術科教育の現状と課題を考察し、内外の美術教育の思想と実践を通じ、人間形成における美術教育の意義を理解する。学習指導要領の目標と性格、具体的な内容と方法について理解を深めながら、子供の造形表現の発達及び思春期における表現の特質と指導上の課題について考察する。また、表現や鑑賞を通して感性や創造力を高め、生涯にわたり心豊かに生きる情操を養う美術教科育の特質と在り方について学ぶ。

工夫した点と意図、目的

■ 工夫した点

「ワークシートの活用」

■ 目的

- ①講義内容に対する理解の向上
- ②主体的な学びへの取り組み

■ 概要

担当授業は講義形式のものが主である。本授業実践では、①講義内容に対する理解の向上、及び②主体的な学びへの取り組みの2点を目的にワークシートを活用した授業実践を行った。ワークシートの内容は講義内容のポイントとなる事柄の設問や、本時のテーマ関する内容の自由記述の設問、本時の講義内容を自身の言葉で**200字**程度に整理し記述させるものである。

ワークシートについて

■ ワークシートの内容

- i 講義内容のポイントとなる事柄の設問
- ii 本時のテーマに関する内容の自由記述の設問
- iii 本時の講義内容を自身の言葉で**200**字程度に整理し記述

■ 各設問について

i の設問は、「①講義内容の理解向上」に関わるものであり、言葉として覚える必要のある事柄などを中心に設問した。

ii の設問は、「②主体的な学びへの取り組み」に関わるものであり、取り扱ったテーマに関連した内容に対する自身の意見を述べる自由記述の設問である。

iii の設問は、「①講義内容の理解向上」 「②主体的な学びへの取り組み」に関わるものであり、講義内容をこちらの提示したキーワードを用いて短い文章にまとめるものである。

設問例及び学生の回答について

■ 概要

ここから実際のワークシートに記載した設問内容と学生の回答例を取り上げる。

- なお、設問の「i 講義内容のポイントとなる事柄」については、穴埋めや基本的な知識に関するものであるためここでは取り上げない。
- 「ii 本時のテーマに関する内容の自由記述」の設問については、設問例と学生の回答の一部を編集したものを取り上げる。(授業の際にフィードバックで取り上げたものである。)
- 「iii 本時の講義内容を自身の言葉で**200**字程度に整理し記述」に関しては、学生が直接記入したものの画像を参考として添付する。

設問例及び学生の回答について

■講義テーマ

戦後の民間教育団体の思想とその影響（第9回講義）

■設問内容

民間教育運動の思想の中で自身がこれまで受けてきた美術教育と関連していると思うものについて意見を述べてください。

■学生の回答例

- 校内の風景を油絵で描く単元があった。対象物を捉え、生活とのつながりを重視しているという点から新しい絵の会の影響を受けていると感じた。また、遠近法などの技術指導もありこの点も影響を感じた。
- 小学校の時の木版画。引き継がれているなんて思ったこともなかった。
- 木版画。学校で見える景色を行った。生活を見つめるということがストレートに行われていた。

設問例及び学生の回答について

■ 学生の回答例

- お絵かき教室では創造美育協会のように写実ではなく創造的な絵画を好み、描かせるところだった。幼い内から創造性を育む点では良かったと考える。
- 自分の世界を描く授業。デッサン等を学んだあとに自由に描く課題があった。皆で同じものを作っていく課題では上手い、下手がわかってしまうが、自由だと自分基準でのびのび描け、美術への苦手意識が変化し、美術を少し楽しくなれるような課題だった。
- 高校で自画像の授業があった。使った画材は油彩だった。骨格研究や筋肉のつき方、顔のどの部分を描くかは教授されなかった。「自分を見つめなおす」「よくみて描く」などの指示はあった。これは日本版画協会の「ものの見方、考え方について深く捉え直す」に影響を受けているのだろうか。

設問例及び学生の回答について

■ 学生の回答に対する所感

多くの学生が自身がこれまで経験した美術教育の内容から戦後の民間教育団体の思想や教育方法の影響を捉え直したうえで、自身の考えを回答してくれた。版画やデザインといった題材が民間教育団体の思想の影響を受けたものであること知り、美術教育の内容が様々な思想を基に実践として確立してきたことを捉えた回答が多くみられた。

最後に取り上げた回答では、版画教育の思想としては解釈が誤っている部分はある。しかし、教育思想との関連を通して自画像という「自己の内面性の表現」が主となる題材を捉え直すことで、自画像にも筋肉、骨格等の人体の構造に関わる技能的表現の面があることを感じ取った回答になっている。こうしたフィードバックを通して新たな知見が生まれる点にも本実践の意義を認めることができる。

設問例及び学生の回答について

■講義テーマ

児童の造形活動の発達過程（第13回講義）

■ iii 本時の講義内容を自身の言葉で200字程度に整理し記述

【4】 本日の講義の要点を①子どもの造形表現の発達過程のキーワードを用いてまとめてみよう。(200字以内)

1	2	歳頃	は	向	か	そ	つ	く	う	う	と	う	意識	は	低				
く	触	る	変	形	々	せ	る	な	ら	下	感	触	を	味	う	行	為	自	
体	を	契	レ	む	。	3	歳	頃	に	な	る	と	フ	か	む	。	破	る	。
掘	る	た	め	る	。	7	歳	頃	に	な	る	と	フ	か	む	。	破	る	。
レ	4	歳	頃	で	目	的	を	モ	ッ	テ	創	意	エ	夫	を	レ	ッ	ク	リ
は	レ	め	る	が	計	画	性	は	な	い	。	5	歳	頃	に	は	最	初	か
う	目	的	を	モ	ッ	テ	フ	く	る	。	も	の	同	工	に	関	連	性	が
あ	り	フ	く	ッ	テ	モ	の	で	長	期	で	遊	ぶ	な	ど	レ	ッ	キ	ク
ル	ー	で	制	作	を	レ	翌	日	に	ま	た	が	ッ	テ	制	作	す	る	。
と	モ	可	能	に	な	ッ	テ	い	る	。									



成果について

■ 「これからの美術教育の展開」(小レポート)について

本授業では、授業のまとめとして第14回講義内でこれまでの講義で取り上げた内容を踏まえ、これからの美術教育の展開について自身の考えを述べる小レポートを課した。学生からの回答については第15回講義で取り上げ、全体に共有しフィードバックを行った。

■ 学生のレポート(一部抜粋)

- 社会とのつながりの見えるような教育になっていく。そのため、3DCGやVRの発達により、平面思考よりも立体思考の需要が高まり、造形表現が重要になると思う。
- 美術教育の歴史は、新しい教育方法やその批判を受け入れ実践を繰り返しながら発展してきたように思う。そのため、教育者として新しい知識を探求し続け、教員としての目、そして芸術家としての目で物事を見ることでこれからの美術教育を展開していけると感じる。

成果について

■ 学生のレポート(一部抜粋)

- 児童・生徒の興味関心のある事柄を把握し、授業の題材として取り入れることで若者の美術離れや美術嫌いの克服にもつながると感じる。美術館での鑑賞会など日常生活と美術を結びつけながら工夫して授業づくりを行う必要があると感じる。
- 個性の伸長が大切だと思う。生活、環境が違うからこそ個性が生まれると考えるため、自分を見つめ直す機会として生活画が大切だと考える。
- 歴史による教育内容の変化から、自身もいつか今まで教わってきたものとは全く違う事を教えるようになる時もあると思う。美術教育の歴史を思い出し、変わりゆくこれからの美術教育に自分なりの教師としての活路を切り開いていきたい。

成果について

■ 学生のレポートにみられた様々な視点

以下に示すように本レポートでは各学生がそれぞれの視点をもって自身の意見をまとめてくれた。自身の美術教育論を関連する学問領域と関連付けてまとめることが本授業の目標でもあることから学生達から多様な視点が出てきた点は本授業の成果が表れているように思う。

- 美術教育の歴史、現代社会の状況に焦点を当てたもの
- 感性や個性の伸長などの児童生徒を中心に位置付けたもの
- 美術教育の場（発表の場や、制作の場）の広がりに着目したもの
- 題材や授業づくりに焦点を当てたもの
- 表現者である等身大の自分の視点からの考察したもの

成果について

■ 学生のレポートに対する所感

本レポートは事前にテーマを伝えただけで、授業時間内に30分程度の時間で行った課題である。多くの教員採用試験等では、時間内に小論文を執筆する課題があることから、その後のキャリアを見据えたうえで設定した内容であった。多くの学生が時間内に自身の意見をまとめることができた点でも、これまで授業内で講義内容を短文でまとめる等の実践を行った成果がここにも表れたように思う。

本レポートの内容については、これまでの講義内容を踏まえ、これからの美術教育について自身の意見を述べるものであったが、すべての学生が単に講義内容をまとめるのではなく、自分なりの視点で考察し、まとめた内容であり興味深い意見が多くみられた。

課題、改善点について

■ 文章でまとめることについて

授業開始当初は学生の記述の文量や記述内容のばらつきがみられた。授業回を増すことで改善されてきたが、学生自身が文章を書くことや、講義内容を言葉でまとめるということに慣れていないことが要因の一つとして考えられる。そのため今後は文章の書き方や、内容のまとめ方についても講義の中で解説する等、細かな対応を行うことで改善していきたい。

■ フィードバックの方法について

本年度は学生たちの意見をこちらで整理し紹介する形でフィードバックを行った。今後は学生のより一層の授業への参加を促すためにも口頭でのディスカッション等、自他の意見を発表し合う対話活動を取り入れることも検討している。

まとめ

- 本資料では自身の担当授業である、美術教育論のワークシートを活用した授業実践の実践内容や成果、課題と改善点などについてまとめた。本授業実践は①講義内容に対する理解の向上、及び②主体的な学びへの取り組みの2点を目的としたものであり、様々な改善点はあるものの一定の成果を見出すことのできた実践であった。
- ②主体的な学びへの取り組みという点では、ノートに自分自身で整理し、まとめるといった方がより主体的な学習活動であるという指摘もできる。自身はスライドを用いた授業形式では内容の進みが早く、板書とは異なり内容を俯瞰することは難しいという点で、ワークシートの活用を進めているが、学生の主体的な学びを促すためにはどのような工夫ができるのか、ワークシートの内容改善を含め今後も考察を進めていきたい。

資料は以上になります。

ご精読ありがとうございました。